になつて貸席の主人の懐中に入る。これ位な事て裸になる筈はないけれども、天草邊りの者が度重つて通つた日には丸裸になるも當然であらふ。

この娼妓の親達は相當の財産を有し、可成な店を開いて居る者でありながら、僅かな金で情の切賣をして稼がして行くと云ふ、情ないとも何とも云へぬ親達だ、これがこの地の風習である。それで娘の方はと云ふと娼妓になると、美麗な服裝もされるし、遊んで居てもいゝと云ふところから、甘んじて其賤しい稼ぎをして平氣て居る。

○土佐國の娘さん見

土佐國には古來『娘さん見』と稱する一種の夜遊びがある。男子十七八歳以上にもなれば、一寸小奇麗なる身裝をして黄昏過る頃より、各自思ひ〳〵に年頃の娘のある家へ遊びに行くのである。この

習慣は城下にはないが、村落ひ行けば大抵皆この夜遊びをする、就中東部に位する村落が最も甚しい。されば此等の諸村落にて年頃の娘を持てる家は、毎夜若衆の詰め掛くるもの夥しく、殊に縹致のよき娘ある家などは若衆を以て充滿せられ、遲れて行きしものは、座敷に上ることも出來ずして空く立歸るもある、娘の家に取りては甚だ迷惑千萬て一見其煩ひ堪えざるが如きも、土地の風とて敢て之を五月繩がる樣子もなく、却て名譽として鄕黨に誇るの傾きがある。蓋し年頃の娘を持ちながら若者の遊びに來たらざる家は、餘程の格式ある家か左もなくば平素村から擯斥せられたる家であるからだ。

扨この若衆の娘の家に行きて何をするかと云ふに、五節句及び鎭守の祭等にて業を休む時は、歌骨牌其他の遊興をなすこともあるけれども、先づ多くはくだらぬ世間話や人の噂にて持切り、駄酒落の一つも云ふて座中を笑はせ興がるくらゐが毎夜の落ちである。尤も

中には何右衛門の息子何作の悴とて三味を彈き皷弓を摩り、滿座を睥睨して鼻蠢めかすもあるが、是等は元より出色のもので二十人に一人あるや疑がはしい。其代り是等は藝人とか粹人とか、娘達にやんやと持囃さるゝこと甚だしく、遂に是が愛のかけ橋となりて、何時の間にか親の許さぬ内緣を結ぶものも往々ある。要するに此夜遊びなる習慣は、土地僻陬にして料理屋等の如き、若男の遊び場のなきより起れるものであるから、男女の風儀を紊すことは勿論であるが、之去りとて其割合には私通野合の類は少い。これ多くの男子が孰れも女子に云ひ寄らんとして、互に他を制するから遂に自他共に目的を達せぬのであらう。

長門藍島の色子

長門國下の關より僅に海を隔てゝ藍嶋といふ小島がある。平日商

船の立寄ることは稀で、只和船の舟着として名のある所であるが、風惡しく霧深き時は諸船皆此嶋へ錨を投じて一時碇泊する。諸船が碇泊すると間もなく『色子〳〵』と呼びながら、數名の婦女を乘せた小舟が諸方より集り來りて、一夜の春を買はんことを勸むる。これ此地に於ける娼婦で何れも赤無地の長襦袢を着し、髮は根上り島田で種々の切帛をかけて居るが簪はない、和船へ乘るには如何な高い所でも上より網を下すと同時に、之を攀ぢ上ることは恰も猿のやうである。尤も商船へは色子自ら來たらず、色子を乘せたる小船の船頭が來て乘客に上陸遊興の事を勸むる。客若し其の勸めに從ひて上陸すれば、先づ之を鹽風呂に入れ、例の色子は各自好みの襟をかけ、裾を高く摹げ客の背中を流しに來たり、其皮膚を自慢に客の撰擇を乞ふて、始めて敵娼が定まるのである、又この地にて客に對して萬事の世話を爲す者は何れも男で、他地方の妓樓に於ける新造の

如き者は絶てない。

それで此沖出娼妓には必ず、〻兒と云つて小女郎が隨伴て居る、其は娼妓の見習ひと娼妓の足拔きの監視と、今一つは『肩を按してやんなはれ』と云つて、一寸お客の肩に手を上げて、何程かの纏頭を占めさせる爲てある。

紅城の畫眼

（手柄岡持）

北州に鬼あり、其母晦日の月の夜に四角なる卵を呑むと夢みて、この鬼をうめり、名けておいらんと云ふ。此おいらん筆なくして書き劔なくして殺す、書くに口を以てし殺すに手を以てす。志の厚き事蹴防湖の氷の如しと雖も、終に打解てはまるべく、情の深き事飛鳥川の淵の如しと雖も、終に瀬となりて照さるべし。畫師の工絶妙ながら、幸に神魂を畫く事能はず。若し此繪の華魁に神魂あらば、此袋を見てしつたかといはん。

下紐はとけてもさうはさらの皮　性は眞赤な嘘の川竹

飲食

名古屋の茶事

全國中茶事の最も盛んなるは名古屋てあらう。上中下を問はず一般に茶事に熱心で、上流の家には茶席があつて、毎月何日釜日と稱し互に往來する。中流は別に茶席の設備と云ふはないが、短冊だんす旅だんすくらゐな用意はあつて、來客に抹茶を立てゝ出すは通常煎茶を出すやうである。下流に至りては種々あれども、先づ其日稼ぎの者大工左官車夫に至るまでも、好みて茶を飲むといふ風俗である。從て茶の宗匠と云ふ專門家の外に、茶事を指南する者が澤山あつて、平均一町内に二三人は必ずあるさうだ。てれ等の敎へを受くる者は、他家へ行き茶の出た時に飲むだけの心得のために習ふのて

中より以上は大抵宗匠に學ぶのださうだ。名古屋では郵便配達にまで、茶を立てゝ出すといふ惡口があるが、この一事でも如何に茶事の盛なるかは想像せらるゝ。

伊豫東部地方の暗がり雜炊

伊豫の東部地方では、若者が夜分寄合ふと『暗がり雜炊』といふ事をやる。それは普通の雜炊に、わざと昆布又は干瓢のやうな長い物を、切りもせず洗ひもせずに入れて、大鍋で煮るのである。それが出來上ると、燈火を消し眞暗にし、各自勝手に大茶碗に盛つて食ふのである。程よく昆布や干瓢等の入らねば味は美いが、若し入つたら長きに困るばかりでなく、砂を嚙んだり鹽辛かつたりして、仕方がないさうだ。馬鹿げた遊びてはあるが、また面白味もある。

東丹波地方の盲食ひ

東丹波地方にも右の『暗り雜炊』に似た盲食ひといふことがあるそれは村の若者が三四人も寄合ふと、盲食ひ行るべして前掻或は掬ひといふ漁具を携へて、盲食ひに爲すべき材料を小川や溝へ捕りに行くのだが、勿論暗に溝や小川の中を浚つて來るのであるから、其獲物の何なるやは解らない。其儘大きな鍋の中に投じ能く之を煮詰て、後食するのであるが、火は點されぬといふ定めであるから無論眞暗である。『あつたぞ四ッ足の蹈が、』『馬鹿そんなものがあるか夫れは蝦蟇だよ』『オヤ〳〵』『君は片偶で靜かにしてやつて居るが何か好い物に當つたか』『軟いやうな硬いやうな何とも判斷の出來ぬ、臭ひが甘酸いぜ、嚙むとギリ〳〵云ふ、是では困るから灯を點けくれ』『然うかそれなら灯を點けても好いが、』と灯を點して見ると

下駄の鼻緒を犬が肴の大骨をくわへたやうにやつて居るのだから、思はず皆の者が吹き出すといふ始末である。無論暗紛れに小川や溝の中を浚つて獲る物であるから、其中には甚だしい不潔物または種々雑多の汚物もあるべきに、斯かる事を行ふとは如何に風習とは云へ、實に呆れ果てたる次第である、所謂暗汁の最も下等なるものであらう。

羽前山形の剝け日のとろゝ

羽前の山形地方では陰暦六月一日には、『剝け日』と稱して家毎に必ず芋汁を食ふ習慣がある。始まりし時や其由緒は分らぬが、維新の頃より一層盛んになつたさうだ。邦音剝けは六月に通じ六月日には身體の皮膚が剝け變ると言ふて居る、故に芋汁を喰べて奇麗に剝け變るを望むの意であらう。先づ惡魔除とて門口に少し溢し、其

より家内一同俱に食膳に座つて、目出度啜り始むるのである、副菜物は炙り紫蘇の葉、乾海苔其他吉兆のものを用ゐる。芋汁にする芋は、里芋山芋自然薯等何れも好みに應じて撰ぶので、早朝より家内睦ましく摺り初めるのである、又此の日は朝餉前に『凍りこぼり、すがの氷』とふれて賣り歩く者がある、即ち清潔なる冷水を飲むで心身を祓ひ清むる意味ではあるまいか。

若狹山田の放生會

若狹國大飯郡山田村で毎年陰暦八月十五日に放生會といふを行ふこの日は當番の家を除く外は一村煙を上げぬと云ふ日である。當番の家では村内の者一人殘らず本膳附の大饗應をするので、二三日前より近所縁者が寄集り、それ〳〵の準備をする。十四日の晩より村内二十余家の主人は集まりて其夜は夜明しだ、夜が明けると一同氏

神八幡神社に詣で宿に歸れば、村内一同兒供も老人も一人殘らず集て來る。酒飯は元より餅も搗く醴酒も造る、食ふは飲むは無禮講で思ひ〳〵に騷く。娘が唄へば祖母が踊る主人が酌をする下男が威張る、兒供は兒供同志で好み〳〵の物を喰かす、十六日の朝迄は家も崩るゝばかりの大騷ぎ、三百六十五日の苦勞も此一日の樂みのためだといふ風だ。この村は戸數僅に二三十戸人口百人餘りて、村内には一戸の小商人もない山間の孤村である。

播磨姫路の祝ひさとう餅

播磨姫路の習俗として毎年十一月三十日には、朝來町々の餅屋又は菓子店で、軒頭に靑葉附の竹を一本建て、之に五色の紙を長く繼ぎたるを下げ、平假名にて『ざとうもち』と筆太に記してある。これは皆其家の主人の書くので、中には其字體の讀難いものが多くあ

る。當日は何れの店も繁昌して買手が甚だ多く、曾て賣殘の出來たことはないさうだ。之は古來游士より町家に至る迄如何なる貧乏人でも、之を買求めなければならぬのである。毎戸當日此餅を買置て翌十二月一日の朝、神佛に供へ又家内の者が祝ふて之を食ふのである。この風習は姫路及其近在のみに限り他地方にはないさうだ。傳へ云ふ寛延二年姫路城主酒井雅樂頭忠恭公が、上州前橋より姫路城に移りし時、士民餅を製して祝したるに始まれる事で、今猶この風習は行はれつゝある。

信濃の冬至南瓜

冬至に南瓜を食するの風は所々にある事であるが、信濃國の松本地方及安曇郡筑摩郡地方は、今尙盛に行はれて居るので、殊に松本の市中にては冬至より二三日前に、南瓜の產地なる筑摩神田などよ

り、陸續昇ぎ來りて市中を『冬至南瓜、神田南瓜』と賣歩くと、各家の奥さん令嬢などいと嬉し氣に、下女を指揮して八百屋を呼び入れ、買入るゝまでの騒ぎはなか〳〵である、又老爺老婆は商人を呼び止め、大道にて買つた負けたと先を爭ひ買求むるもある。扨當日に至れば其家風に因りて、朝之を食するものもあり晝食するもあり夕食するもある。其烹方も種々で鹽烹にするもあり、醤油烹味噌烹各自の思ひ〳〵で、婦人小供等下婢下男は腹も膨るゝまでに暴食し欣々然として打興じ、これで寒中は風邪の患ひはないと云つて居る。

又南安曇地方に至れば何れも農家であるから、平生注意して冬至南瓜は其年の最大なるを撰み、凍傷せざるやうに居爐裏の火棚或は籾の中、日當りよき椽端若くは藁屑に包みて貯藏し置き、當日之を取り出して食するのである。其初盛りは神佛に供へて感冒時疫に侵されざるやうに祈念し、而して後一家打集ひて之を食するのである

冬至南瓜に付て左の如き狂句がある、以て其風俗を知ることが出來やう。

火棚より南瓜のおりる冬至かな
冬至まで籾に寢て居る南瓜かな
小春日や椽の南瓜に蝶の來る
南瓜切る庖丁寒し冬至かな
風邪の根を嚙い切る今日の南瓜哉
買ふて行く下女も南瓜の朝冬至
冬至日は嘘を筑摩の神田から
冠せ賣りせぬ鍋の南瓜は

諸國の雜煮

▲東京、角餅にて燒き、すまし。菜、鷄、鳴、芋等を入れる。但

し菜を入れるが普通で至極淡泊である。

▲京都　田餅にて生。味噌、甜芋、小芋、人參、大根、燒豆腐、慈姑等を入るゝが普通である。但『花鰹』とて鰹節を掻きたるものをかける。

▲大坂　略ぼ京都に同じ

▲新潟　角なる餅を湯煮して別に茶碗に盛り、碗には大根、芋、蒲鉾、葱など種々の所謂雜煮にして、鮭の腹子を添へたるを盛る。

▲米澤　すまし。水餅を切り燒豆腐、大根、牛蒡、人參、鮭のはら、子、油揚、芋等を入れる。

▲靜岡　角餅にて燒き、すまし。芋、大根、菜、蒲鉾、鷄等を入れ、『花鰹』とて鰹節の薄く削りたるをかける。

▲千葉　角餅にて燒き、すまし。菜、芋等を入るゝが普通である上等は鴨、蒲鉾等を入れる。又青海苔、花鰹、はゞと稱する海藻な

どをかける。

▲會津　すまし。水餅を切り、菜、芋、大根等を入れる。

▲宇都宮　角餅にて燒き、味噌汁。大根、芋、人參、小鳥の叩き肉等を入れる。

▲高知　角餅の生、すまし。菜を入れ青海苔をかける。

▲金澤　角餅にて燒き、すまし。昆布出しにて煮、其れへ芋、菜慈姑、燒鯛の肉等を入れ、花鰹をかける。

▲岡山　圓餅にて生、味噌汁またはすまし。芋、大根、鰤の肉等を入れる。

古人酒を飲むに當りて、先づ左の頌を口にす。

此酒芳氣。　迎滿二天下一。
祭二諸佛等一。　祭二諸靈等一。
天福皆來。　地福四滿。

（拾芥抄）

遊戯

伊豫宇和島の闘牛

下等動物を闘爭せしめて娯樂となすの風習は、何處でも流行することで、多くは小鳥鷄犬の類で、其慘酷なることは云ふまでもなく、非文明的の遊戯には違ひないのであるが、伊豫宇和島地方に行はるゝ闘牛會は、勇壯とすれば勇壯、慘鼻とすれば慘鼻、兎に角牛こそ迷惑の次第で生命を懸けて闘ふのである。

闘牛場は概ね山間の馱場で幾個所も設けられてある。馱場は周圍十町許りで四方より觀覽せしむるため、山腹を段畑の如くにして、闘牛場は平坦の土地、其闘牛會を催す當日は殆んど五里以内の闘牛が集合する。其數百餘頭大なるもの小なるもの、若きもの老たるも

の赤きもの黑きもの、各其名を繡ひたる五寸巾の長さ三尺位の帶を腹卷の上に脊より兩側に垂らして居る。この帶類は羅紗縮緬の類で作てある。又其名は力士の如く種々面白き名が附けてある、闘牛會に連れて來る時は飼主は勿論の事、近所の若者共其牛を擁護して場へ乘込むので、戰ひは正午より開始する。闘牛を始むる時は宛然力士相撲の如く、勘太郎が双方の牛を呼出す。而して東西から牛を牽出して總ての繩を除き去れば、直に闘爭が始まるので、兩方とも各二三人宛行司幇助勢が、手に破竹を携へて牛の頭部若しくは臀部を叩く、牛は互に鎬を削り秘術を盡して挑む、角の音は戛々として砂煙を擧て縱横無盡に戰ふ、闘爭が烈しくなれば頭部より鮮血流れ所々に手傷を負つて其慘狀は見るに忍びない。然れども見物人は壯と呼び快と叫ぶ。一方の牛が到底敵し難きを知れば直に疾風の如くに逃げ去ると、勝たる牛は之を追ふて行く。平常大兵肥滿悠々たる動物

も流石に死に瀕する時は、自然に其運動も異なつて猛烈なるは驚くべく、若者は此暴れに暴れたる猛牛を容易に捕へる能く熟練したるものだ。而して勝たる牛には五色の幣を與へる。其時飼主は滿面笑を含み、負けたる方は愁然として居る。この闘牛が數時間に亘り勝敗決すべくもあらぬ時は引分ける。毎會數十番の闘牛があつて日暮頃終を告げる。見物人は瓢を携へ陶然嬉々として此慘劇を見物するので、何時も見物人は千人餘りはある。

この闘牛は概ね農家に飼養して、農用の餘暇之を闘はしむるけれども、啻に闘牛として飼養せるものもある。價格は一頭五十圓以上百圓位で、闘牛會の前十數日間は滋養物を與へ角を削り、偏に戰を全勝せしめんことを望むて居る、蓋し勝敗に因て價格に大變動を來たすからであらう。闘牛は其角が唯一の武器であるから、幼少から勤めて角を前方に突出さゝしむる爲め外方に開くを妨ぐので、此地方の牛の角は總て前方に出て居る。

闘牛は從來農家の娯樂であつたのが、今では觀覽料を徴收するし甚だしき賭博をする者もある、從て批難する者もあるが農牛奬勵の爲だと理屈を附て依然流行して居る。勝負を決するは一方が逃げたる時、舌を出したる時、聲を出したる時は都て負となるのである。

隱岐の闘牛

隱岐の闘牛も亦有名なもので、古來の習慣と殊には近時種牛改良の方便と、飼主が闘牛に勝を制しやうとの競爭心から、近來益々盛んに行なはるゝ。今宇和島地方て行はるゝ闘牛と異なる所を記さんに、闘牛に用ゐる牛は三歳以上八歳までのもので、同歳の牛で其會社て取組を定る。さうして雙方の牛に一人宛綱取といふ者がつく、此綱取は牛の鼻に長さ七八尋の綱を附け、之を端より輪形に手繰り、

牛の鼻より一尺五寸乃至二尺の所を右手に握り、左手に輪形の綱を持ち、而して雙方より綱取が呼吸を見合せて寄るや否や、闘爭を始むるので、其勢ひ凄まじく頭部より鮮血の流るゝを頓着せざるは勿論、外敵を拒ぐ唯一の角は折れても毫も屈せず、秘術を竭して闘ふのである。又綱取は各自絶えず聲を發して牛を勵ましむる。闘爭長時間に亘るも勝負の決するまでは、闘牛が如何に疲勞するも行はしむるので、勝敗の決したる時は、其勝ちたる牛は直に人を以て囲まれ、牛の頸部より背部一面に多人數の負の人が乘る。そして鼻綱は三四十人も之を持ちて、闘牛場を聲を限りに囃しつゝ引張り廻る牛も平氣なもので多人數を乘てドシ〳〵歩む、これは勝ちたるを自覺して喜ぶからだと云ふ。之に反して敗けたる牛は逃ぐるが如く姿を隠くす。

又闘牛の三枚以上の所になると豪したもので、先づ土俵入の時は

伺主自製或は負より寄せたる幟旗の類、幾本と數の知れない程一頭に附隨する。加之酒樽を擔ふ者が後方に居る。其旗幟には『怪力』『八劍山』などゝ記してある、而して如何なる人にも無料で觀覽せしむるのである。

陸中盛岡地方の相撲

陸中の盛岡地方の相撲は妙である、土俵が四角で他の國々のやうに圓形ではない、『角芝』といつて居る。それで引分だの預りだのといふことはなく、何でも勝負を定めねば見物が滿足せぬ。同時に轉べは何うしても取直さねば承知しない、從て一番の取組ても三番も四番も取直すことがある。これは昔からの習慣ださうだ。因にこの『角芝』は九州の方にもあるさうだが、他に餘り類はないやうに思はれる。

安藝廣島地方の「づぼんぼ」

四方に霞たな引き初めて四海波靜に、新玉の初春を迎ふれば萬の物事目出たく、自から人心も浮き立ちて種々の催しがあるがうちに廣島地方に行はるゝ『づぼんぼ』なる遊びほど面白きは少なからう何時の頃誰が始めしと云ふことは解らぬが、十年ばかり以來の流行にて、興ある遊びであるから歳々に盛んに成り行くやうてある。

先づ『づぼんぼ』とて厚き紙にて龜の形せるものを作り、首尾に二厘錢四足に一厘錢を糊附なしたるものを座の中央に置き、十四五人之を圍みて、手に〳〵團扇を持ちて『づぼんぼや、づぼんぼや』と調子に乘り囃し立て煽る時は、『づぼんぼ』は次第に座りし人の肩の邊まで昇る、かくて繞圍せる人の肩頭背何れにても身體の中に、『づぼんぼ』が落つる時は其人は座の中央に出で、四つ這ひに『づぼん

ぼ』となり、二三遍歩行き廻はる定めで、不幸にして『づぼんぼ』となるや四面より『づぼんぼや、づぼんぼや』と囃し立らるゝから、各〳〵自已の傍に落ち來たる時は、必死となつて他方へ追ひやらうとする。年頃の娘又は妻君など落ちられたが最後、人中で四つ這になればならぬから、極り悪く耻かしく顔を眞紅にして、縮てまり這ひ出し能はざるが、這はずと見れば一層盛に煽ぎ囃し立てらるゝから、止むなく歩出す面白さ、賞賛の聲喝采の音暫しは鳴りも歇まず興に乘じて往々夜を明すこと多く、宵に新しき團扇も翌朝は骨紙の滿足なるものは少ない、以て其夢中なるたとを知るべしだ。この遊びは多く中流以上又は軍人の家に行はるゝ。

薩摩串木野地方の金輪投げ

薩摩國日置郡串木野村地方にて男兒の正月の遊戯に、『金輪投げ』

と云ふがある。夫は集まれる童子を等分して、雙方の間四十間ほどを隔てゝ逆路の東西に陣を構へ、先づ東方より徑五寸位の鐵輪を敵の方に向ひて地上に拋ち轉ばしむるのである。さるを西方に列を整へ待設けたる一群は、竹竿にて貫きとむるを法としてある。若し一方に於て首尾よく貫きし折一方にて貫き損じたる時は、敗者より勝者に對して味方の一人を降參せしむるので、斯の如く幾十回も繰返して演じたる後、味方の總勢悉く敵に奪はれたる方を負となすのである。それて兩方の主領を『だいゆう』と呼び、配下の者を『せこ』と稱する。『だいゆう』は大王の訛音てあらうか。

土佐の凧揚げ

土佐に凧揚げと云つて昔からの風習があつて、今も益々盛んなる景況を呈して居る。男子の出產とか、運動會とか或は其他の祝ひ事

とか云ふと、必ず凧を揚げるのである。凧は正方形で、大なるものは疊十二枚敷、十八枚敷などゝいふ物があつて、風が強く吹く時は三十人や四十人の力では、到底持ち堪へることの出來ぬものがある尻尾は凧に準じて太き繩の幾條を一條に合せ、其繩に幾條となく、四寸乃至五寸巾の長き紙の尾を附し、凧の揚る後、幾百の群集せる小凧に取らせるのである。小凧は俗に掛凧と稱し、大さ大概疊半枚位で、大凧の紙の尾を掛取らんとするには、大ならず小ならず、取扱ひが便利であるさうだ。この凧を揚げる時期は、農事の閑な舊一月の間であつて、田には作物がないから、踏み荒される氣遣はなく、凧揚の人に取つても、結句障礙物がなくて宜しいのだ。

近來は何か祝事といふと、直に凧を飛ばすけれども元來この凧揚と云ふものは、男子出產の祝ひが昔からの風習であるさうだ。生れた兒が高く天下に名を揚ると云ふ意を取て、其で初めたものではあ

るまいか。

高知市でも亦近郷でも、富豪の家に男兒が生るゝと町内の若者近郷なれば村の若者が集まつて、其家の定紋或は舞鶴に龜を描いた大凧を持ち行きて祝ふのだ。其家では其凧を受納して、其凧に用ゆる絲及び尾にする紙を求めて、若者に其紙を巾四五寸位に長く繼がしむるのだ、若者は出來る丈け長く繼ぎて、各々自分の持前なる籠に詰め、凧を揚る時常に其凧に從ふのである。

凧の絲を持つ幾十の若者は風の吹き來る方向に向つて、野川沼田畑の別ちなく速かに走らねばならぬ。幾百となき無數の小凧は、其尾を取らんとして、長く絲を延はし之を追ふのである。日暮れば皆凧を卷きて勢よく歸り、大酒宴が初まる。斯の如きこと二日乃至三日にして、祝ひ全く終るのである。富豪の家にては、凧の尾にするに、高價なる羽二重及び縮緬の長き幾條を以てするものもあれば

或は紅裙數十を狩つて凧を揚げさせるものも尠くない。

三河豐橋地方の凧揚げ

三河豐橋地方の凧揚げも隨分盛んなもので、毎年五月頃より初りて舊端午の節句頃迄は行ふ。其頃になると或は高く或は低く天空一面に飛ぶ凧の數は、殆んど數へきれぬと云つても宜しい位だ。其種類は澤山あるが大概は奴凧扇凧鯰凧、けろり、べたばり、やつはな等で、其他は各自其好みて製作へて名を命けるから限りはないが、兎に角凧揚げの盛んな土地だといふのは、假令へば素封家に男子が出産れると、其町の若者から大凧を製作へて祝賀に贈る。これを受ける家では豫め其準備をして置て、先づ一同を馳走する。

偖いよ〳〵凧揚げとなると、毎日多勢の若者は廣野へ繰り出して彼の町のは一千枚だ此の町のは二千枚だ、三千枚だと其紙數の多い

のを競爭する。これ等の凧になると普通傘紙を用ゐ、其骨は樋に用ゐる太い丸竹である。又之を揚げるにも大勢かゝつて甚だ大業だ、併しそれには菰樽、辨當、柏餅などの用意があつて、皆集つて茲處で飲食ひをする。算盤持つては素より合はぬ勘定なれど、同地では此祝を受けるのが名譽である。

肥前長崎地方の凧揚げ

長崎地方の凧揚は此土地獨特の妙技を有して居る。毎年三月十日の金比羅神社の祭日が第一番の會日で、二三日前より陣取といふて凧揚げに最も好き場所を見計らひ、竹を打込み名前を書て場所を取置くのである。當日になれば市中の老若男女は、今日を曠と着飾り

「よッしり、よいさ」の掛聲で、大小の凧を青竹に挾み毛氈或は莚を肩にかけ、辨當酒肴を用意し、大家は下男下女に角籠を擔はせて

登山する。朝十時頃より日沒に至るまでは人の絶ゆる事なく、一の鳥居から内は道を挾みて數十の露店が列つて居る。凧揚げの場所に至れば、彼方の天幕の内て太鼓三味線て騒げば、此所は手踊で浮かれて居る。凧揚連は其戰に忙はしく、幾千の凧は中天に梨子地を作り、一枚切れば一枚切られ、互に妙技を競ふて居る。近在の農民は

「やだもん」と稱へて大竹の先に尖りのある草木を結び附け、空に、ひら〳〵と切れ行く凧を、爭ふてこの竹に卷付て拾ふのであるから凧の切るゝ度毎に群衆は喝采をなし、幾十のやだもんは彼處此所に時ならぬ笹藪を現出せしむるのである、斯んなふうであるから勢ひ喧嘩の盛んなる事も亦見物である。此日が終れば次は三月十五日、男風頭山女風頭山、二十八日の四度が大會て矢張金比羅山の如くはづむのである。市中でも二月から三月は毎日數十の凧が見えぬ時はないが、四月になれば「四月凧は犬も喰ぬ」と云つて顧みない。

下總富勢の掃除日

下總國東葛飾郡富勢と云へば辨天樣の有るので有名である。この村に毎年二月十六日『持寺』とて年寄達の念佛がある、其翌十七日には掃除日と稱へ、若者達集りそれ〴〵取附け庭掃除などし、午後より出直に來たり酒を調へ座を左右に占め、黑塗の大椀二個に浪々と酒を注ぎ、左右へ順次に飲み廻り、その廻終る時末座に控へたる者一人づゝ出て、張子の三尺ぶらゐの大松茸と榊の葉を入れたる籠を持ち、唄は隨意にて一つ二つ踊をなし元の座につき、其より盛上と稱して酒つぎ直し順次に首座に返す。返し終れば左右又誰にても出て前の如く踊るのである。其時若し前年二月より此方嫁を娶りしか又聟に來りし者あれば、人々其顏に墨を塗り、嫁を呼んで眞黑な御亭主の顏を見せるのが例である。其次三度目の椀が左右に廻ればめといふ柏子をなして、當日の世話役を座敷の眞中にて胴上をなして終るのである。

丹波地方の日天樣のお供

丹波地方にては『日天樣のお供』と稱して、毎年春秋彼岸の中日に行厨を携へて未明に家を出で、何處といふ的處もなく只歩行を東に取りて、散〴〵散歩する奇習がある。午後になれば太陽を送るの意であらう、正午までとは正反對に方向を西に取りて進み、日の沒するに及びて各歸途に就くので、要之當日は少しも太陽を背後にすることなく終日隨行するのである。それで之を行ふ間は、決して家に入りて喫飯することさへ斷じて爲さぬ。從て喫飯の際などは茶に換ふるに水を以てする。これは概して中流以下の老婆婦女子に多いのであるが、兎

に角奇異なる風習で、何の爲に行ふのか又其由來等は更に分らないが、暑くなく寒くなく野遊の好期節であるから、日天樣に託けての行樂に外ならぬ。又土地によりてこれを『日天樣のお迎ひ』とも云ふ。

土佐の隱居の魚釣

何處の國でも隱居する身分になると、お寺參りと大抵寸法は極つて居るが、獨り土佐の國は趣が相違して居る。男でも女でも隱居すると、毎日鮒釣沙魚釣りと殺生三昧に餘命を送る。殊にこれは婦人に多く見受けらるゝ、雨の降つた翌晴には、腰の曲つた老婆連が三々伍々列をなし釣竿を肩にして行く光景は、甚だ奇觀である。

根室の花廻り

北海道の根室地方の風俗の異樣なるは、內地に於て見るべからざる奇觀である。これは全國各地の、人情風俗の異なつた人々が集合したる、新開鄕土なるが爲てあらう。就中最も異樣を極めたるものは『花廻り』と云ふ一習俗である。彌生の春の花なき里も、之が爲めには姸を競ひ、爛を鬪はす程しかく賑やかな花を咲せるのである。これは越年の無聊を慰むる手段として、斯る慣例を作たのであらう四月中旬殘んの雪も庭の面に消果てたる季節、根室町內の寺院の境內で、花顏の少女幾十人、或は幾百人美を盡し麗を極めたる化粧に造花を捧げ、佛堂の周圍を二周するのが一儀式で、これに二種の別がある。第一日には可憐なる幼女の一群が、楓の如き手に花を捧げて、重げなるを見るであらう。第二日に於ては芳紀は二八か二九からぬ處女より、二十一二の娘盛りの一隊が、面はゆげに蓮歩を移すを見るであらう。斯くて僧侶が朗かに讀經しつゝ、その一隊を引率

せる紅袖翩々。百花爛熳として打續くの光景は、人をして恍然として、仙境に在るを疑はしむるのである。

この花廻りは、根室婦女子の唯一の娯樂の日として、且つ化粧に耽けるの時である。又この當日こそは、最も其美貌と優姿を誇るの折である。故に之が列に加はらんとするものは、已れの美を讃せられんとし、之が列を觀んとする者は、彼が美を稱せんと欲せざるはなく、其の和氣藹然として些の騷擾なく、些の嫌味なきは、天下の一異彩である。

それでこの花廻りは、如何いふ理由か知らぬが、門徒と法華の兩宗派では行はない。

山城京都の茸狩

京都で茸狩に最も適當の場所といふは稲荷山といへど、其實稲荷

山よりは山科附近が最上の場所である、山科は演劇の文句通り一里半だ。道路平坦にして人力車汽車自轉車船にて御勝手である。茸狩は京都では嵐山の櫻よりも樂みにして居る、何となればお花見時は知人と家内くらゐであるから左のみ面白くはないが、茸狩と來ては一町中が出掛るので、事によると一區内が總出をすることがある。それを何故樂しむか、何故面白いかと云ふに、町内のみいちやんが出掛るの彼處の菊ちやんが行くのと云ふ騷である、亦割前さへ出せば誰でも行けるので。扨茸狩の當日は男女擧つて美に美をつくし、集合所に集まるのである、其中の世話方とか會計方とかの命令を堅く守らするのだ、それから何々會だとか何々組だとか記してある旗を押立て男女隊をなして行く。町内の茸狩ぐらゐては藝者は居ないが、區内總掛りの時は藝妓舞子の二十人餘は居る、尤も區及び町によるが。又諸會社銀行等もこの通りだ。それて茸の安價い年には縞

物會社紡績會社などの職工、數百人隊をなし會社より出掛ることもある。

扨山に着すれば彼處の松繁れる丘、紅葉の淡く染出したる邊りに老若男女呼かはして互にその得物を誇りあふさま、春の櫻見より興味遙に多いのだ、得物が集まれば其に軍鷄なり牛肉なり鱧なり相合煮にして、上戸れは飲み下戸なれば食ふのである。下戸は亦土産の茸を狩らんとて男女手を握り登山するが、其日茸狩が縁となり山の奥にて怪しき夢を結ぶことがあるから、若き男女は演劇角力よりも此茸狩を樂むのてある、素より得物の有無には關はらない。誰やらの句に、

松茸をたゝき出したる扇かな
茸狩のから手でもどる騷ぎ哉
人をとる菌はたして美くしき

越後新潟の濱行

寒風吹き捲つて荒濤高く打寄する新潟港の海濱も、五六月頃よりは波浪漸く沈靜に歸し、四疊半に鬱陶しき藝妓遊びせし者を迎ふるにぞ、『濱行』とて新潟第一の遊樂は行はるゝのてある。濱行は主に鰯網を目的とし、五圓十圓を投じて網を曳かしむるので、漁夫等が〳〵いや〳〵の節面白く網曳くを眺めながら、藝妓に圍まれ濱邊に席を設けて酒宴を開き、獲たる鰯は即席料理、舌皷うちて賞翫措かず、黄昏に及んて歸路に就くのてある。目睫の間に佐渡が島根幡り、眞帆片帆を翻弄する態は何に譬へやう。

周防秋穂浦の下知火

周防國山口から六里程南に秋穂の浦といふ村落がある。其灣の中

に竹島といふ島があつて、山光水色共に絶佳な處だ。こゝに『不知火』と云ふ一つの奇習がある、頃は陰暦六月十七日恰も安藝の宮島祭の當日で、住民は『十七夜』と呼んで居る、其日になれば夕暮頃から大騒ぎで、土地の若者連が百事奔走する。一體全村の八九分は漁師だが此日は皆業を休むでるから、碇泊船が幾十艘となくある、てれ等の船へ酒や肴や太皷や三絃などを積乗せて、帆檣には紅燈と提燈とを二十五づゝ吊るし。別に一千の蠟燭を用意して置くと同時に、海濱一帶づらりと船へ乗らぬ者が蓆を張つて、これも酒肴鳴物を用意して居る。斯くて夜の九時半頃ともなれば、五ヶ處の各村の寺々から一齊に三聲の鐘を打つと、それ〳〵の船は各々紅燈提燈に灯を點じ、陸からは一齊に一千の蠟燭を蒲鉾板に立て火を點じて冲合へ流す、かくて船は各纜を解いて、星のやうな蠟燭の間を巧みに縫ふて灣内を逍遙する、實に筆紙につくし難い美觀で、それに快晴

であれば滴たるやうな月や、きら〳〵する星は光を映して海一面玉を散らしたやう。それに船でも陸でも笑ふやら唄ふやら、大亂痴氣でこの一夜を明かすのである。

日向飫肥の綱引

日向國南那珂郡飫肥町では毎年陰暦八月十五日、即ち十五夜の當日は戸毎に早朝から餅を搗き、日の暮るゝを待ちて椽先に机を持ち出し、是に餅柿栗甘藷其他何れも十五づゝ盆に盛りたるを載せ、其側に芒を活けた花瓶を添へて月を祭るを例としてある。

此日此町の字本町今町等に住む十五歳以下の小兒等は、各自集まつて綱引をするを樂みとして居る。小兒等は豫て藁竹などを貰ひ集め置けば、其日になると父兄達が打寄りて、竹を細く打割り之を編んで心となし、其周圍に綱を絡つて長さ五六十間にもあまる大綱に

拵へ、これを町内の片隅に堆く積み重ねて置く。夕刻となるを合圖に小供等は襁褓一枚に、後鉢巻といふ身輕な打裝をして家を飛び出し、東西に分れて總身に力を籠め『えんよーやッさい』と勇ましく掛聲しながら引合ひ、勝負を爭ふた揚句、更に本町から今町に行く又今町から本町へ來て、再び勝負を爭ふのである。尙夜になると壯年等が出て勝負を爭ふため、其掛聲が四方に響渡つて壯快なることは言語に絶するばかりである。この夜は遠方から遙々見物人が群集して其賑やさかさは非常であるが、雨天は日送りであるから若し當日雨天なれば翌日に延ばし、猶天氣が惡ければ其翌日といふ工合にして、往昔より今日まで一度も休まず行つて居るのは、畢竟土地の邊鄙なるが爲めでもあらうが、月見の餘興としては面白い遊戯である。

寒國の雪滑り

雪中兒供の遊戯の數多あるうちに面白きは『雪滑り』であらう。辷り方には種々ありて『ぼほら』『竹ぼほら』と稱する竹下駄を穿きたる、七八ッの兒童も二十歳ぐらゐまでの男女も打交りて、影法師踏む月夜の晩に雪滑の遊戯をなすのである。平地を辷るもの坂路を辷るもの、殊更に雪にて斜面を作りて辷るもある。滑かな雪の面を辷るに二三間先より馳け行て、或は隻脚に或は兩脚を揃へ或は跼蹐て辷るもあつて、辷るに勢つきて七八間は辷ることを得るのである。子供の辷ることの出來ぬものは、子供の頭となれる者が肩に太き繩をかたげて、足には鐵の『かんじき』を穿き凍れる雪の上を踏みて挽きつゝ進む、一人の兒童はこの繩に縋り、其他の二三十人の兒童は肩より肩に猿繋ぎにつかまり引かれつゝ、五町も六町も辷り

ながらに往戻りする、月明りに唱歌など唄ふて、道路の凹凸に遇ふには群童一時に轉倒することもあり、男女辷り轉げて打興ずるを以て樂みとし、夜の更くるをも知らざるものゝやうである。

羽前羽後地方に『馬乘』『据り乘』といへる雪辷りの戯がある。坂の上より『馬棒』とて親指大の竹を燒きて、弓形に撓めたるものを股に挾み、初め中腰にてチヨコ〳〵と走れる後身を馬棒の上に乘せ下駄履ける足を前へ揃へ、据り乘は身をかゞめて辷り下るのである

加賀國河北郡邊にては方言『すべりこ』と云ひ、通常平地に於てするが綾かなる坂道が最上であるさうな、粗末なる木履を穿ち、先づ其底にて雪の面を研て滑澤鏡の如くになし、夫より他の兒童と列をなして立ち、先達の合圖と共に一齊に滑る。或は中途にて突然隻脚となり或は鳥の如く雙手を擴げ、竹頭に手拭を結附て旗の如く靡かす等、滑稽を極めて競ひ勵み、道路の傾斜の盡きたる處に至りて

始て止まるのである。熟練の者は足駄を穿き一滑に快速能く二三町の間を進むさうだ、又傾斜の激しき急坂にて、蓆板などの上に座禪を組み或は匍匐ひつゝ、七八人相續きて落下するのもある、これは後者前者打重なりて轉倒する等の危險はあるけれども誠に壯觀である、此技は石段にてなせば、震動を與ふる故に一段の面白味があるさうだ。

北國地方の雪合戰

雪拋げやさながら春の花戰、雪合戰は何處にても雪降る國の兒童の遊戯であるが、北國地方の深雪の裡に育ちし兒童はまた格別のことである。始めは雪にて家の形などを造營て相樂めるものゝ、互に堅牢を誇り遂に城廓を構へて、高く壘を築き日を期して戰を挑み、雪を掘りて彈となし戰備漸く整ひて、片唾を呑みていざ彼の壘壁崩

しくれんづと、初の程は遠く隔りて雪礫を以て相闘ふも、漸く近間に迫りて遂には攫合となり降り積む雪を浴せかけ、力弱きものは雪中に埋められ、雪玉飛ばしての激戦奮闘、或は壘を崩され或は敵の本城を乗取り意氣揚々たるに、何時の間にかは敵は間道より迂回し背後より遙にあらはれて遂に我が城壁を奪はるゝもあれば、又敵の本城を乗取るも永久占領の見込なき時は、其城壘を破壊して立退く卑怯の勇士もある。

北國地方の玉栗

北國に『玉栗』一名を『玉割』といふ兒戯がある、始めは雪を圓めて鷄卵の大さに握り固め、其上へ雪を幾重もかけて足にて踏固め或は柱にあてゝ壓かため手鞠の大さになりたる時、他の童の作りたる玉栗を庇下などに置しめ、我が玉栗を以て他の玉栗に打ちあつるので、強き玉栗弱き玉栗を碎くを以て勝敗を爭ふのである。此玉栗を作るに少し鹽を入れれば石の如く堅くなるので、互に鹽を入ることは禁じてある。

又『雪燈籠』といふて、雪を丸くつくねて石燈籠の火衾の如く横に穴を堀り、燈心の太さを一筋油に浸し中に入れて點火するので。其狀や誠に可憐である。

越後地方の「さい」渡り

越後國にては三冬の末つ頃雪は日に晒され雨に遇ひなどして、其嵩みも減り濕氣を帶て朝な夕なの寒氣嚴しき時は、滿地の雪氷の如く氷結して、其上を人の通行するも足の痕さへつかぬやうになれば子供等は野となく山となく、縱横無盡に三々伍々隊をなして勇ましく、兵士の行軍の如く濶歩し、又は馳驅の競爭などをするを『さい

波り』といふので、なか〳〵壯快なる遊である、殊に雪の能く凍る時は必ず好天氣であるから、遠く眼の及ぶ限り悉く白銀を敷き、青空は鏡に似て白玉の山を照し、身は白銀盤上に立ち、風に御して揚々天に揚らんとするの思あらしむるので、其清絶快絶なる、とは雪なき國の人々の到底想像し能はざるところである。

慶安の頃、江戸にて地黄坊樹次、池上底平と大杯を以て酒戰を試みたりき。後文化十四年兩國柳橋にて大酒大食の會を興行し、酒組、菜組、飲連、鰻連、蕎麥組などを分ちて暴食暴飲を競ふ。或は三升入の盃に酒六杯半を傾け、更に水十七杯半を飲みたるあり、或は飯六十八椀、醬油二合を喫したるあり、蕎麥六十三杯を盡すに至れり、世人其狂痴に驚きたり。（日本風俗史）

歌舞

伊勢古市の音頭

『伊勢音頭』と云へば直ぐに伊勢の古市が聯想せらるゝ通り、古市の名物はこの『伊勢音頭』である。音頭は從前は柏屋油屋備前屋杉本屋の四軒でやつたが、柏屋は廢業するし油屋は旅館になるし、現今は只、備前屋杉本屋の二軒のみで、舞臺の仕掛から踊の手振其歌曲も多少の相違はあるが、先づ大同小異である。偖其音頭の始りは柏子木の音を相圖に、三味線胡弓で賑かに囃し立てる、杉本屋ではこれに琴を雜へる、此奏曲の中に細長い舞臺が糶り上る、すると左右の花道とも云ふべき所より『よい〳〵よいやさア』と手拍子面白く厚化粧した二十餘人の舞子が舞袖翩々と出で來るを切掛に、拍子木の

音に上の欄間より、火を點じた儘、五十餘個の提灯が下る、この提灯には備前屋は源氏車、杉本屋は菊壽の定紋がついて居る。それが同じ數の雪灯に映じて、滿樓悉く火の壯觀を呈する。爰に一寸述べたい古市大樓の特色ともいふべきは、洋燈を一切使用しないことで、この音頭にも皆蠟燭のみを用ゐるのである。音頭の時囃子方に要する藝妓の數は六人ださうだ、で春季は大抵其準備が屆いて居るが、他の參宮人の少い時季に突然見やうとすれば、其準備に多少の時間そ要することである。それで此音頭は燈火の作用によりて奇麗に見せる仕掛てあるから、白晝見に行くときは四邊の戸を閉して夜の趣に變ずるのである。兩家の舞子及び囃子方なる藝妓の衣裳は、備前屋は定紋の源氏車に、散し櫻を白く拔いた水色縮緬の着物で、緋羅紗の帶を占あ杉本屋のは同じ着物に同じ帶、只定紋の菊壽と白く拔いてある所が違ふばかりだ。舞子は皆娼妓で足りない時には稀に藝

者の出ることもある、已に客の對手をなして居る娼妓も、音頭が始まれば舞子となり出行くのである。

由來伊勢音頭は古への間の山節を唄ふたので、間の山節は僧行基が世人に無常を示さんとて、唱歌數種を作りて比丘尼に唄はしめたのが始めであるといふ、其文句を下に錄さう。

『夕べあしたの鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、聞いて驚く人もなし、　合　花は散りても春は咲く、鳥は故巢に歸れども、行きて歸らぬ死出の旅、　合　野邊より彼方の友とては、金剛界の曼陀羅と胎藏界の曼陀羅に、血脈一つに珠數一連、これが冥土の友となる。

これを間の山て娼妓等の踊に唄ふたものてあつた故、間の山節の稱が出來たのである。しかし物の哀れなる節であるから廢れてしまひ、今は只淨瑠璃に間の山といふ音頭が殘つて居るのみて、踊の唄

は年々其家毎に新作を出すのである。

この踊りの時に客が敵妓をきめるのであるが、何しろ藝妓連が一齊に迦陵頻迦の鳥の音も宜しくといふ調子で歌を謠ふ時、綺羅を飾つて出て來るのであるから、夜目といひ遠目といひ、天津乙女の天降つたやうな姿を見て、非常な美人と思つて買被りをすることもあるさうな。

陸奥森岡の金山踊

金山踊は陸奥森岡の花柳界で流行して、森岡藝妓の得意とするところ、兎に角名物の一つに數へられてゐる。此踊は元和寛永の頃藩主が金銀の入用ありしも、金山奉行は谷山の鑛穴すべて掘盡せしため大に心配し、一方には諸役人工夫を勵まし、一方には自身山澤を跋渉して、一大良鑛源を見出さんとつとめしに、一夜夢に谷内川の

下流に金箔の流るゝを見て大に喜び、夜明けて探りしに、果して良鑛を發見して役儀を全ふしたので、藩主奉行を召されて御酒を賜はりしとき、奉行悦びの餘り自らかゝめ節を唄ひ、鑛石精選を奏でやせしとか、これが金山踊の濫觴であるさうだ。左にかゝめ節を記さう。

『からめ〳〵と、おやぢがせめる、なんぼからめても、からめだてアならぬ、ハアからめて〳〵、からめて千貫、おやぢの借金年賦ですませ。

『金のべこゝに、にしきのたづな、おらもひきたい、ひかせたい、ハアからめて〳〵、しつかりからめて、握つた手綱をうつかり放すな。

『からすア、なく〳〵、とこやのやねて、お山繁昌と鳴く鳥、ハアどつこへ〳〵、どつこへ千兩、どつこへ萬兩。

『おかねが出る〳〵、白銀黄金、鐵も鉛も銅も。ハアどつこへ〳〵どつしり掘出せ、お國の名物。

『目出度〳〵の、若松よりも、盛るお山の黄金花、ハアかねつる千年、からめは萬年、

『なをりアでゝくる、世の中はゆたか、どこもかしこもみなはんじやよう、ハアどつても繁昌、〳〵。

『なをりアてゝくる、お山が盛かる、かみもこまいも、みな盛かる、ハアどつても繁昌、〳〵。

『いなかなれども、南部の國は、西も東も金の山、ハアからめて〳〵、からめた黄金は、岩手の花だ、どんどと、ふきだせ。

『花が咲く〳〵、御國の山は、北も南も黄金花、ハアからめて〳〵、からめた、こがねは、岩手の花だ、どんどと、ふきだせ。

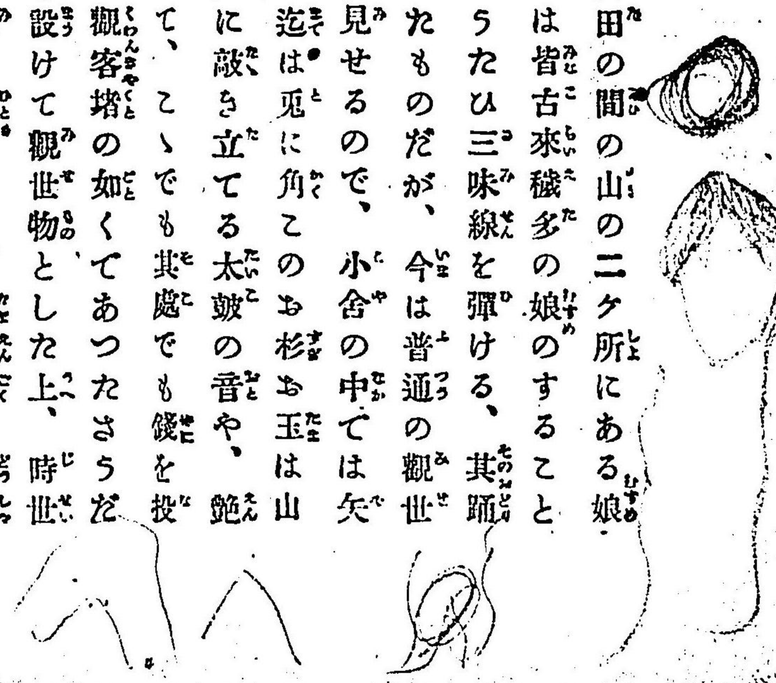
『からめ〳〵と、お山の歌はお家はん昌と、なりひゞく、ハアからめて〳〵、からめた黄金は、岩手の花だ、どんどと、ふきだせ。

肥前有田地方の「まだら」

肥前國有田地方に『まだら』と稱する一種の歌舞がある。其さまは各家の婦女子、多くは三四十乃至五十歳の婦女が、新婚又は出産のありし家に集り、十人或は十四五人龜酒粗肴を備へて環座し、やがて唄につれて一同手を拍つ。其中の一人は小皿四つを把り、左右の手の指に二つづゝ挿み、歌の拍子に合せてこれを打ちながら舞ひ踊るのであるが、其皿を打つ音は小鉦の如く、其姿は四ツ竹を拍つやうである。又『まだら』の音聲曲節は、三十三所觀世音の靈場を巡る西國巡禮の御詠歌のやうである。

伊勢のお杉お玉

『お杉お玉』とは伊勢宇治の牛谷、山田の間の山の二ケ所にある娘手踊の觀世物である。この手踊に出るは皆古來穢多の娘のすることで、昔は參宮人は路傍に陣取りて歌をうたひ三味線を彈ける、其踊子や囃方に錢を投げながら此處を通つたものだが、今は普通の觀世物と同樣に、小屋を設け木戸錢を取て見せるので、小舍の中では矢張錢を投げるとのことである。維新前迄は兎に角このお杉お玉は山田の一名物として盛んなもので、賑かに敲き立てる太鼓の音や、艶なる踊子の姿は漫るに行人の袖を留めて、こゝでも其處でも錢を投げると、巧みに夫を外す樣を興がりて觀客堵の如くてあつたさうだが、維新後は前に述べたやうに小家を設けて觀世物とした上、時世に合はない馬鹿氣た物であるから餘り觀る人もなく、只遠國の道者



連が折々其小家に入るばかりである。

裏面の模樣は先づ舞臺ともいふべき二坪許りの板敷の上に、一座に列した十七八から廿二三位迄の、紅粉を念入に施した女が、一樣に派手なメレンス幽禪の振袖を着て、囃し立たり又踊つたりするのである。踊りの種類に依りては一人の事もあれば二人のこともあるやうだ。このお杉お玉の專ら謠ふ唄は伊豫節で左の文句である。

「伊勢に宇治橋、內宮に外宮八十末社の宮めぐり、お杉お玉に間の山から、しまさん紺さん中乘さん、岩戸さんへ道つゞき、二見が浦には朝熊山。あふむ石磯部比丘尼に大太神樂に、これな申しやつて行かんせ。

又宇治橋の下で『網受』とて長い竹竿の先に五色絲網を張り、往來の人に投錢を乞ふものがある。今は錢に替ゆるに橋の袂で賣て居る、五色の木製の球を以てするが、小さな球を拋つてやると巧に受

る樣が面白い。

四國地方の「ただら」講

四國の在方に「たゞら講」と云つて祭禮ほど賑やかなことがあるこれは同地方の大師八十八ヶ所の各寺院内で、毎年々番を定め執行するので、一組凡そ二十四五人宛集合し數十組となり、鐘其他のからかねの奉納物を鑄造することもある。當日は寺内に場所を造りたゞりを据え、其の前方に音頭取一人拍子手打一人、采配持ち三人、之れは男の兒供を用ゐる、工人十人づゝ左右にならび、音頭の歌につれて拍子木を打ち、采配を左右に振りつゝ面白き振にて手足を動して踊る。一番より順次に數十番終日之を繼續し日暮を以て散會し翌日になれば前日の終りの番に當りし組にて其製作物を掘出し、之を鑄物師に渡すのである。尤も志願あるときは寺院外の農商家の軒

前で、執行することも往々ある之を庭踏みといふさうだ。

羽前秋田地方の念佛踊

念佛踊と云ふは羽前の秋田地方で、神社佛閣の建立又は修繕とか或は紀念碑生碑などを建立したときに行ふ式て、この日には村中の者老若男女の差別なく皆其の前に集合して供養をする。それが濟むと太鼓を木に結び附けて打つ者が一人、笛を吹く者が二人、それから踊手が十四五人、或は顏に白粉を塗り、或は花笠色手拭、或は華美な衣裳を着け、各自に意匠を凝らして、音頭に連れて踊り出すので、其の賑かなことは一と通りでない。

羽後酒田の大黑舞

羽後國酒田市では毎年舊正月となれば、『大黑舞』とて勸進のため

二十人程の婦人が各自編笠を被り、白地の浴衣を上着として三味線太皷を携へ、十二三歳の女兒二人を惠比壽大黒に打扮せ、他に法衣をつけ鬼の假面を被りて、旗を持ち賽錢箱を背負ひたる男一人附添ひ、一組となりて、元日より二十日頃までも日々各町を練り歩き、家々より受くる賽錢の多寡に應じ、三味線太皷を打囃して唄ひ、二人の女兒に踊らしむるのが例である。斯くて二十二三日ともなれば一同最寄の寺院に集りて、家々より貰ひ來たる賽錢を勘定して、其寺院へ常燈笠鉾額等を奉納したる上、終日遊び暮し大黒舞を納めしとて、各自喜び合ふ風習は昔も今も異らぬので、『秋田の大黒舞』と云へば東北地方の名物である。

常陸水戸附近の豐年踊

常陸國水戸市附近にて年々祭禮の折り、『豐年踊』と云ふを行ふ。

先づ村内にての年若き男女顔に紅白紛を塗り、小さき笠へ金銀五色の作り花を飾りて、其周圍に鈴をさげたるを冠り、メレンスの揃ひの衣裳を着、三色に染分けたる襷を十字に綾取り、白足袋雪踏のチャラ〳〵打扮の美しく共に輪をなし、囃方にては笛『岡崎返しとやえ』を吹く、太皷摺鉦を打鳴らすに連れて、『あはは一イ一』と語尾を長く引き、

『今年や世がよい、豐作年に、桝がいらぬで、箕で量る、すッとこどッこい、なんまいだ。

と鳴物と共に囃し唄ひつ踊りつ狂ふのである。これは神慮を慰め豐作の祈誓をなす爲めであるとか。この地方の若き男女はこの上もなき樂として、指折り數へて當日を待つとのことである。

羽後阿仁の豐年踊

阿仁は秋田縣の北部に位する繁華の地であるが、毎年陰暦七月十三日から豐年踊といふを行ふ。當日は村内の若者共打ち集ひて、五六十人を一組として繰出し、『はーすさゝ、はーすさゝ』の音頭に、鳴物の調子を合せて踊るのである。衣裳は總て郡内縞又は縮緬などの單衣で、白の鉢巻をなし襷を綾取り、裾をからげて下に化粧廻しをゞめ、紺の股引に草鞋がけといふ扮粧で打揃ふさまは如何にも目ざましい。其行列は第一着に馬印、次は紅白の旗數旒、棒持とて長さ六尺余の樫の棒を持てる者、鐵砲槍長柄の立傘弓取等である。次に武者三騎木馬に跨り小具足野袴にて旗を負ひ、鈴音勇ましく挾箱は兩人に擔がせ、獅子頭を冠りし小供三人萬歳二人、次は警固の者四人之に從ひ、囃子は笛太鼓を叩き鉦にて調子能く踊り、棒合せ扇子舞駒踊などといふ技を演するが、中に獅子舞の曲、萬歳の祝は特に古雅なるを覺ゆるのである。

京都の六齋念佛

京都の『六齋念佛』は毎年盆の十六日に、二十人も三十人も多勢の人が寄り集つて、圓形に立ちならび、其服裝は揃ひの浴衣に白縮緬の兵兒帶をゞめ、腰には新しき手拭を挾み白足袋に堂島と云ふ下駄を履き、襷を十文字にあやどり、一人が笛を吹き、一人が鉦を叩き、其餘の者は皆左手に太鼓を捧げ右手に撥を握り、敲き且つ踊るので、踊りながら敲くさまは餘程巧妙なものだ。其の歌は安宅さつ橋其他洒し何でも先達の調子につれて唄ひ囃すのである。

讃岐高松の盆踊

讃岐高松の盆踊は土地自慢のものであるから之を紹介せやう。先づ踊の打粉より述べんに、盆前より土地の若者等は夜も碌々寢ない

で、稼ぎ貯た金で染物屋呉服屋へ思ひ〳〵の注文をする。或者は稲妻形或者は濡燕の形模様に、不破名古屋を氣取るもあれば、蝶千鳥曾我兄弟と五人十人町々の若者が、意匠を凝した浴衣地の揃ひに編笠姿深く踊りに出る。之が通例だか近來はだん〳〵變つて來て、緋縮緬の長襦袢是れ見よがしに踊るもあれば、五つ紋に義經袴編笠といふ扮裝、乃至は姫御前、洋裝看護婦といふ風體もある。尤も女子は帶をさゝやに結むで凛々しく嬌音を弄するのであるが、男女入交りたる樣は中々凄まじい程てある。

踊方は急調と緩調との二種ある、急調の方は『一合蒔た』といひ、緩調の方は『よやさ』と云ふのてある。何故かと云ふに急調の方は其踊始めに、

『一合蒔いたら、籾が出の其外有高は一石一斗一升一合一勺』

と極めて急に歌ふ故であらう。緩調の方は其文句の句切に

『さアーよーはい〳〵、よーいやさー』と極めて長音に唄ふ一人音頭を取れば衆人『さあよほい』と和して、順次代る〳〵唄ひ行く、緩調は唄ひ踊るものは長い段物て小栗判官の一代記とか八百屋お七とか、お染久松とか夫れ〳〵出しものを定むるので、この文句なぞもなか〳〵面白い、節自慢の若者は續けさまに唄ひ行くのである。これをくどきと云ふ。急調は亦極面白いもので、其踊り方の極めて急なる代りに、又疲れ易いからさう〳〵長くは續かないが、一團頽れるかと思ふとまた一團、此方に起つて交る〳〵踊る。彼方此方も三々五々一團をなして踊る。踊りの特長は中踊、固有の節は勿論何節ても足拍子に合ふから面白い、ほーかい節に愉快節、お竹さんに高い山から、おツぺけぺー何でも適するが、今はおツぺけぺーが此踊を占有して嶄新奇拔な新作を、左も自慢さうに今日を曠と披露するので、文句を聞くだけで、一段の雜踏を添へる。踊の場所は

盆前より豫て町々の世話方が、市街の空濶なる所を定め其筋の許可を受け置くので、山形の紅提灯は一段の光景を添へ、電燈の燦めく下には立錐の地だになく、世話方は高櫓に儼めしく非常を警しめ、「よーほい」の聲は耳を聾するばかりである。急調の踊文句の思附たものを此處に記さう。

『今晩の踊子さんは、郷東か新橋か、新橋なら瓢箪ぶら〳〵。
『笹に短冊七夕祭、思ひ〳〵の歌を書く。
『茶屋の行燈に梅屋と書て、梅に鶯來て止まれ。
『八重垣（遊廓の名）女は佛の暮し、花や線香で日を送る。
『八重垣女は親切女、雨の降らぬにかさくれた。
『今の若衆は炬燵の櫓、四角四面て丸がない。
『今の若衆は雪踊の裏金、金がなくてはちやら附けぬ。
『人の手前は薄茶と見せて、今夜濃茶の四疊半。

『主と妾は妹山脊山、お顔見ながら任意ならぬ。
『色が白いとて金米糖に惚れな、甘い顔して劍がある。
『盆が來たとて踊らぬ女性は、腹に三月の孩兒がある。
『わやくるな〳〵踊子さんよ、あすの晩と云ふてない踊り。
『惚れてつまらぬ他國の人に、末の鴉の泣別れ。
『主と妾は新茶の出花、末は茶かすで棄られる。

緩調の分は文句が長いから記載することは出來ぬ。

信濃新村の盆踊

信濃國東筑摩郡新村に專稱寺と云ふ一大寺がある、其境内の觀音堂の前で、毎年陰暦七月十三日より十七日迄の五日間は、夜の更くる迄近郷近在の男女が、思ひ〳〵の異裝をなして集まり、若きは十一二歳より二十四五歳迄の男女、二三十人づゝ圓く輪をなして十五

六組も踊り廻る。角力甚句を踊るもあり、飴屋唄を謠ふて踊るもあり、又扇子の如く拵し板木を以て拍子を取り踊るもある。其廻り踊るうちには音頭取とて、年長の男女が替る〳〵音頭を取て唄へば之に連れて他の者が謠ひ出すのである。其唄を左に記さう。

『盆にやござれや、盆にやござれ、死んだ佛も盆にや來る。
『盆や〳〵と云ふも今日明日限り、明後日は山のしなれ草、しなれた草を櫓へ上げて、下から見れば牡丹花、上から見れば情の花、牡丹花は散ても咲くが、情けの花は今ばかり。
『あの山影て光る物は何じや、月か星か螢の蟲か、月でもない星でもないが、姑のお姥の目が光る〳〵。
『お前行くなら妾をも連れて、のんのこさい〳〵、東しや上總のよへとこの、はて迄もすてまかちよい〳〵。

淡路内膳の火踊

淡路津名郡下内膳村では、毎年七月十六日の夕に、一村凡百二十餘家各自先祖代々の數ほど炬火を作り、これを持ちて火踊坂と云ふに至り、墓所の後の山の半腹の平地で踊り初むるので、何れも左手に炬火を持ち右手には笹のえだを持ち、これを振廻しつゝ輪の如くに列なり、太鼓鉦音頭の拍子に合せて踊るので、又新精靈のある者は下なる墓所で踊るのである。墓所には家々によりて燈籠をつけならべ、殊に新精靈ある家にては切子燈籠をかけ廻はしてある。扨又數次踊りて後山の上より踊る拍子にまかせて、下なる墓の踊りの中へ炬火を投附くると、下なる者は落ちたる炬火を取り空に投上げて踊るのである。其踊の音頭に曰く、

『踊れやれこま、よはねよやれこま、よばくちのさいと成こま

よ。

紀伊園八幡の戯瓢踊

和歌山縣日高郡御坊村大字薗に小竹八幡と云ふ產土神社がある。例年陰曆八月十五日を以て大祭を執行するが、中に『戯瓢踊り』として大字御坊の商人五十歲以上の者七八十名、各自作花の附きたる花笠を冠り、白帷子に黑き袈裟を纏ひ、先づ第一番に一大奇瓢を持てる者、次に傘を持てる者、次に太鼓鉦を持てる者歌に合はして一列に踊り行くので、歌の間毎に『融通念佛なんまいだ、なんまいだんぶつ、なんまいだ』と唱ふるのである。この事は何時の頃より始まりしやは詳かならぬが、瓢に正德四放生會の文字がある。元和の頃藩主が此踊を見そなはして御感に適ひ、又其後寛政の初藩主が特に當村に賜ひし御書がある、之を四恩狀と稱し今も祭日には先づ此文

を讀上げ、さて踊りはじむるのである。其文に曰く、

夫人間に四恩あり、四恩とは天地の恩父母の恩國王の恩衆生の恩なり。凡人間たる者は上は天を戴きて日月の光を仰ぎ、下は地に載せられて五穀菜果を食ひて一生を過す者なれば、勿論一日も天地の恩を忘るべからず。身體を父母に受てより寒暑晝夜の分ちなく、種々の苦勞を以て育てられ漸く成長する事なれば一日も父母の恩を忘るべからず。夫々の職業にありつき父母を養ひ妻子をはごくみ、飢へず寒へずして代々安穩に暮すは皆君上の御蔭なる故、一日も國王の恩を忘るべからず。人生一生の内には樣々の事態ありて、自力ばかりにて世をわたる事叶はず諸人の力をかりて不足を補ひ急難をも救ふことなれば、衆生の恩亦忘るべからず。然るに人間の道は忠孝の二つより重き事はなき故、四恩の中にも取分父母の恩國王の恩を忘るまじき事な

り、常に此二恩を忘れず、父母に孝行を盡し國王の法令を能く守れば、自ら天地の道にも適ひ、衆生の心にも戻らずして全き人間となるなり。

隱岐の「どつさり」歌

隱岐の名物の『どつさり』と云ふ歌は、老幼男女打交りての宴會には、必ずこの歌が大達物になつて會場破るゝばかりの景氣を添へる。さうなると流行歌を專賣とする藝妓の如きは、そつちのけとなるのである。又隱岐へ往つた者は、此節を覺えて土產にせんとて熱心に練習するも、僅かの日子では到底調子の出來る歌ではないから止むなく文句だけ筆記して歸る有樣である。この歌の始まるときは、座中總て一齊に手を拍つ、すると其中の一人が機會を見て謠ひ始めるので、其文句は

『叶うたー、叶うたー、や思ふこと叶うたー、鶴がー御門にー巢をー懸けたー、さのーいー御家これわいどーじやいな、御繁昌とチヨイと眞をー、懸けたさのーい。』

大家の祝宴等にて多數の客になると、歌手が三人乃至五人、三絃引が二三人で各聲を揃へて歌ふのである。

アイヌ種族の「ゆから」

アイヌ種族の野蠻であることは人の知る所で、其野蠻であると云ふ觀念から、アイヌの風習が殺伐慓悍で、彼等の部落には常に血腥き風のみ吹き荒むで居ると思はるゝてあらうが、しかしなかなかさうてない、隨分風流な事があるさうだ。彼等には『ゆから』と云つて、我國の淨瑠璃の如きものがある、しかも淨瑠璃の如く架空の事は少しもなく、事實のみを詞賦に作つたもので、酒宴の際に謠ふの

である、又其舞踏もよく歌の意にかなつたもので、活潑の歌には活潑な舞踏をし、悲壯な歌には悲壯な舞踏をする、而して其樂器に歌を和して一人の婦女が謠ひ出すと、他の者は夫に和して舞踏するのである。

それでこの『ゆから』と云ふは一家の世襲となつて居て、歌の音調樂器、衣類其他舞踏に用ゐる弓矢刀劍の類は、子々孫々相傳へるのであるから、さう云ふ家系の者は、一部落に僅か二三人位しかないさうだ。

今聞くがまゝに『ゆから』の有樣を記せば、婦子の歌につれて手足を動かして舞ひ始むる、或は双手を伸したり縮めたり、或は天を仰いで神に祈を捧ぐるやうな風をしたりする。手は足と共に動作を等しくし、時に地を踏み右足を揚げ、或は左足を揚げ、前に進み後に退き頭を垂れ腰を屈て、左右に舞ふ、其の後に彼の婦子は袖を張り手を擴げて、其夫の踊るさまと同じやうに行る、其の一抑一揚皆節度に諧つて居るやうに見える。其の歌に

『あぶんぬ、しのッと、あんくにねな、

之を再三繰返して謠ふ。この歌の意は

『天神の神よ、どうか我等がこの愉快なる酒宴を全く終る迄、過ちがなきやうにお頼み申します。

と云ふ意味ださうだ、而して又夫れに續いて歌ふを聞くに

『ふエさんがエ、さんがエ、ややア、ささんがエ、よーよー、

と謠ふと、後の婦女が一段高調子で、

『ほぇー、ほぇー、ほほほ、ほぇー、ほぇー、

と云つて相和する。このやうにして此舞踏は終る。この歌の意は、

『噫今日は樂しき日であるよ、如何に樂しき日である、斯樣に樂しい日を永遠に續けて、皆樣と共に樂みたい。

と云ふのであるさうだ。又婦女の云つた『ほえー、ほえー』は只其歌の頭音をとるのださうだ。

男の舞踊を『たぶから』と云ひ、又其歌を『とのほほら』又『さけはら』と云ふ。これは酒はらで酒の歌即ち酒宴の時の歌ださうだ女の舞踏を『ちくぶはら』ともいひ、又『ちかつぶはら』とも云ふこれは鶴舞と云ふ女舞ださうだ。この鶴舞を行るときは婦は五六人相連つて、膝を崩し両手を翳して後を向き前を向き、或は散じ或は合して一様に翻舞する、其様は丁度盆踊に似て居るさうだ。而して

『うるる、うるる、ほほほほ、

と呼び乍ら好く舞ふ。實際この舞踏を見たものは、誰でも彼等の殺風景の様子に似合はない、優しい所のあるに驚くさうだ。

アイヌが『ゆから』を語る時は、琵琶に合して平家物語でも聞くやうで、只其『ゆから』を語る時は樂器を用ゐないだけで、重に深

更に及んで興ます〳〵湧き來ると云ふ時ださうだ。其『ゆから』を語る人は悠然と跌座をかき、暫くの間英氣を養ふといふやうな具合にして、感滿ち來たれば手を以て胸を打ちながら語り始むる。或は仰ぎて鋭き眼光て天の一方を睨め、或は眼を閉ぢて感慨に堪えぬやうな態度をなし、又其音聲は時に高く時に低く、或は咽喉にて呻吟する、が如くに聞え、又感極まれば奮然起て勢を示し、或は泣くが如く或は悲むが如く、種々様々の態度で語る。其音聲の緩急皆節度があつて、決して好加減にやるのてはないさうだ、又夫を聞て居るアイヌの連中は只低頭して一意專心、他に心を亂さない、中には壯烈に泣くか感涙をこぼして居る者もある。

今『ゆから』の内の一曲を譯出せんに、彼等の理想はその狀態を形容する考が、如何にも古雅に且つ巧妙であつて、何となくアラビヤ風の理想を備へて居るやうに思はれる。

暖かい風が吹いて、野にも山にも草木の葉が茂つて、山の奥も見えない時は今は早過ぎ去て、寒い風がだん〳〵吹て來て、草木の葉が壁土色に變て來れば、熊の吠るやうな聲をした風が之を吹落すと、其上に白鳥の毛がだん〳〵積る。左うするとマキリで切られたよりも痛い風が、莚と莚の綴目から吹き込で來る恰度かういふ時節に、余市の山中に一人の老嫗が住居して居たが、只一人の息子を行末は天晴部落中にても、屈指の猛者に育て上んものと、末頼もしく思ふて育てゝ居る。其老嫗は普通の老嫗ではない、今宵も其息子の心膽を練るために、此の曉寒月を踏で、枯木骨の如く氷なす林間を分けて、兎を射て來れと命じて出しやりたるあとに、只一人爐邊に踞まつて枯枝を折ては焚き、折ては焚きして居るが、其火の明滅の間から其老嫗の樣子を見ると、眼の光りは白きまつ毛の奥にて河狸の眼のやうに

光り、其白き頭髪は秋の山の枯枝に白鳥の毛が降積つたやうだ面の皺は冬の海の波が霜柱の立つ汀を、再三洗つては去り洗つては去る白波の如く、口元の踪は洞の上に立てる巖に蒸した苔の如く、鼻の穴の大きくあいて白い毛が其暗い穴から、五六本見えて居るのは、石山の洞に鹿が角を振立て、出入するが如く時々つく息も榕前の火口から吹く火焔の如く見える、恰度其形は人であるけれども、見れば見る程通常の人に違つて居るやうに見えるから、身の毛も戦慄て、唯茫然として佇立んて見て居た。（下略）

琉球の祝歌

琉球で祝儀の始めと終に謠ふ唄がある。これは我國の婚姻の儀式に「高砂や」を唄ふと同じ事であるが、謠ふ時には二人直立して厳

然威儀を正してやるのださうだ。

「九重の、へのうちにつぼみて、露まちよ、
うれしも菊の、花やゆる。

「ときはなる、まつのかはりもなき、
いつもすこりは、いろぞまさる。

「うれしさよ、にはのたけのふし〳〵に、
きみがよろづよの、よはひこめて。

「むかしのうらめた、あかつきの、かん、
今としに、ならす、人なあるや。

「つきひかさなれば、としやくれども、
ゑんなける、いそくたびの空よ。

「たびやはまどり、くさまくら、
こゝろいねてもわすられん。

これに合す三味線は我國の物よりも三四寸短く、棹は紫檀黑檀で皮は海蛇である、調子は殊更高く聲も合せず彈く、我國のやうに上手ではない、我國の三味線は元琉球國から傳來たもので、海蛇の皮を張りたれば「じゃ味線」と云ふのだといふが、琉球のは海蛇の皮ではないさうだ。これはエラブ鰻と云ふものの皮である。

エラブ鰻は漢名を慈鰻と謂ひ、エラブは薩摩と琉球の間にある島の名で、この島は口のエラブ、中のエラブと稱へて二つ三つあるさうだ。こゝに住むからエラブ鰻の名稱が出たのである。

この鰻は常に海からのぼりて島の岩窟に住み、冬になると總身へ落葉を纏ひつけ窟の中に隱れて居る。こゝは島人もなか〳〵往けぬ險しい海岸で、琉球より約十里の南なるイーマンと云ふ島の人が、常に裸體で、楠の獨木舟に乘り、エラブ島に渡り小刀を携へ水中から海岸窟に上り、鰻を目覓て刺通して捕るのである。小さいので二三

尺大なるは一丈餘もあらう。そのちぎれたるは三尺程に切て舟に積み、持歸りて三味線の皮にするのである。

往昔我國の瞽者石村檢校が其弟平兵衛と琉球國に渡り、兄は其曲弟はその製作を習ふて歸つたが、其時の彼の國の唄は、

「ちやらりやら、ふりやう、それひやうらに、じや〳〵に、いよありやよい、ふりやうそれ、るりひやうふりやう。」

之を石村檢校が三味線にのせて、作り替た唄の文句は

「千代の始めの天に照る月は、十五夜が盛りよの、彼の君樣はいつもさかりよな」

之は今も殘つて、酒間往々口にするさうである。

琴曲凡上。慵レ座但含レ情。何煩故揮弄。風絃自有レ聲。　白樂天

正月

東京の松の内

正月の一日より七日迄を『松の内』といひ、其間に種々の慣例がある、今は全然こんな例は廢つたであらうが、元日の白々明には一般と云ふのではないが、多くは主人が『柳の下の御事は』と發言すると、女房を始め家内一同が威儀を正して『されば其の事、お目出度候ふ』と挨拶して顏面を洗ひ口を漱ぎて、雜煮を祝ふ例なので。

また元日は出錢を嫌ひて一錢も拂はず。二日の朝早く大きなものを買ふと云ふ意て、魚岸河へ鯨を買ひに遣るを使ひ初と云つて、此使の歸らぬうちは決して錢を拂はなかつた家が多かつた。此は町家の大なるところに行はれた式例であるのだ。今も猶元日にお錢を支拂

はぬ家が多くあるやうだ。それから元日には決して掃き掃除をせぬので、大晦日の晩には掃くなり拭くなり、夫れ〳〵差閊なきやうにして置く、これも元日匆々出すと云ふを嫌ふ習慣からである。

東京新吉原の脊中合の松飾

新吉原では新年の門松に、本飾といつて脊中合の松飾を立てるが一時この古例も廢れたるを近年ぼつ〳〵又始めるやうになつた。これは往來の眞中へ向ひ合た家同志でお飾をするので、普通の松飾は皆表方の方へ正面を向けるのが例であるが、この廓の松飾ばかりは我家の方へ正面を向けて、入口からズッと離し往來の眞中へ建る。其門松の建て方は松と竹とを立てゝ、丁度人の招々に通れる程に板注繩を渡し、その中央へ各々我家の徽章または屋號のついた番傘を開いて結びつけるのだ。それが双方から往來の眞中へ我家の方を向

けて立てるのだから、そこで御飾は脊中合になるのである。

武藏拜島の達磨市

東京にては毎年一月一日は惠方參りと稱へ、歳德あきの方よろづよしとして緣起商賣の者共は、早旦より其年の干支に當りたる方角の神社佛閣へ、參詣する舊慣の今に存することであるが、此處程遠からぬ北多摩郡には面白き習慣がある。それは同郡拜島村大日堂境内に於て、毎年一月一日に立つ達磨市である。當日は近鄕近在は勿論遠く八王子町等から來る者頗る多く、殊に養蠶家、製絲家、機屋などは男女老幼來つて達磨を購ひ歸る。其達磨は前年霜月頃より製造に着手せるもので、其大なるは二三尺くらゐより小なるは二三寸くらゐ迄ある、何れも張子で目は白い。購ひたる者は之を神棚などへ飾り、其年春蠶の當るを待て一方に眼を入れ、秋蠶若し意の如くな

れば、更に他眼を附し、其双眼の具備するを待て面前に酒肴を供へ一家擧つて祝意を表するのである。

これを商ふ者は東京の酉の市年の市の如く頗る懸直を唱へ、五錢のものを二三十錢くらゐに吹けば、客は相應に値切て購ひ、歸るさに隙を窺ひ店頭に併列せる達磨一個を奪ひ去る。之を奪ひたる者は其年幸福を得るさうだ、若し商人が之を見附け捕えんと欲して追かくれば、後に殘りし人々に悉く達磨を奪ひ去らるゝから、商人は無念ながらも見ぬ振をして濟す。縁起商ひではあり且つは平常二三錢の達磨も、この日は七八錢に賣行くので相應に利潤を得て、斯くは年々歳々此日を以て市を立つるのである。

達磨で想ひ出したが著者の郷里駿河國藤枝町地方の商家では、毎年一月やはり白眼の達磨を買求め一眼を點じて惠美須棚に飾り、『利得を與へくだされば一方の眼も入れます』と唱へ、利得があれば勿

論のことさなくとも歳の暮には、一眼を點じて兩眼となし、川へ納める舊慣がある。

京都初春の釜祭

京都は職人の多い地であるから職戸も從て多く、職戸中釜を用ゐるは先づ本紅染家、糸練家、絹練家、ふかし物家、飴家などである是等は常に大竈に火を焚きて生活する職業であるから、常に釜をば大切にするので、年の暮に『竈つき』と稱して塗直し又はつき直しをなし、月々荒神祭とて神官を招きて拔ひ清むる例は、何れの家でも行ふので、一の定式はなく其家々に因て異なるけれども、春の釜祭の式事は一定して居る。

新年の年立ちかへる目出たさに一日二日と休み、三日に此『釜祭』を行ふのである。當日は夜明けやらぬ時より家々競ふて大鏡餅を供

へ、荒神松に柳、餅花として一と抱ねもあらん柳に餅をつけて、之を大なる壺に活け、にらみ鯛として鯛を新藁一對にて結びたるを供へる時に若者頭が拍子木を打てば、店の者一同釜の前に敷きたる莚に座し、豫て招ける神官は祓ひをする。後皆一同に、『目出たし〳〵今日も忙しくわいて〳〵、わきかいれー』と唱へる。次に三磬の拍子木に若者頭の次役及釜炊頭が、年々意匠を凝らせる裃を着し長き竹に樅を刺通したるを持ち、踊出で手にさし脊にかざして舞ひながら、

『御得意繁昌〳〵、御用は富士より山なし、釜はどん〳〵たきだし目出たい〳〵釜たき目出たい〳〵、

と歌ふ。これにて式は終り招待せる客を誘ひて座敷に往き、大酒宴を開くのである。此日一日は無禮講にて上下の別なく、遊宴に日を消し夕暮近くに及びて、番頭が『お開きッ』と叫べば、先に寵に供へたる大鏡餅を車に載せ、座敷に曳き來たり袴肩衣の打扮の者大斧を以て鏡餅を開き、之を來客に分配すれば客は之を受けて歸るのである。此祭は店の者にて行ふの式であるから、假令主人と雖も當日の事に言を入るゝことは出來ない、酒飯の獻立を始め何もかも店の者の任せてある。

駿河東部地方の穩平竹

駿河國の東部地方では毎年正月五日の日は人別集めと云つて、村内の小供等が寄り集まり、其中の重立ちたる者二三人種々の假面を冠り、大きな御幣を持ちて道祖神の代表者となり、毎戸につきて祝儀を請ふのである。其祝儀の多寡は一々道祖神に伺つて、若し少いときは座り込んだまゝ決して其家を動かない。殊に花嫁などのある家は中々道祖神が承知しない。そして集めた祝儀で大きな竹を購て笹附のまゝ、幣扇子鬼の面達摩などを結びつけて、これを道祖神の

前に立てる。これが穩平竹といふもので世の太平を祝ふのだといふ。

陸前松島の曉詣

風景で名高き陸前の松島に正月十四日の行事として『曉詣り』とてまだ夜の明けきらぬ内に、男女思ひ〳〵に村社氏神などに參詣するのが例であるが、途中若い女のある門口に至れば『孕め〳〵』と高く叫びて門戸を打叩くのである。次に『鳥追ひ』といふのがあるは早天若者共が家の屋根に上りて、『はーい、〳〵』と大聲を揚げ、石油の空鑵などを打鳴しながら鳥を追ふのである。次に『猪追ひ』と云ふがある。これも同時刻からやるが、夫には正月輪飾りに用ゐた細幣、方言『やーへ紙』を集めて采配やうのものを作り、之を長き竿の先に結付けて、『猪、鹿の絡、尻くッくらやーへ、〳〵』と呼びながら屋敷中を駈廻るのである。

信濃稻荷山のどん〳〵燒

信濃國更級郡稻荷山町にては毎年正月十五日に、注連繩を下して燒くを稱して『どん〳〵』燒と云ふが、この風習は他地方にも行はるゝから、その異なる點の概略を記すことゝせやう。正月に至れば豫め市中の財産家へ其年の日待番といふを當附る、この番に當つた者をお頭と呼び、其家では十四日迄に木を以て人形の頭を刻み、神主などの着る裝束を紙にて拵へ着せしめ、之を五間ばかりなる柱の先へ括り附け、柱の上に一本の棒をつけて十文字形になし、この十文字の横木に紙の網三個、中なるは網の長さ五六尺左右のは二三尺のものをつけ、之をお頭番の家の前に建てるのである。其夜になれば町内の老若男女は米餅魚類を各〳〵持參し、酒のみは其家で振舞ふて終夜放談歌唱豪飲に夜を徹する。翌十五日には早朝右の像を取下し

て『どん〳〵』燒の場に持ち行き、町内の子供等が集め置きたる注連繩を悉皆之に結び付け、囃立て騷ぎ連れ火を放ちて燒くので、火がだん〳〵に熾になり今や人形に燃え移らんとする時、掛聲て之を倒し其にて終るのてある。

又當日は其前年他地方から市中へ聟に來たりし者を、現場に臨ましめて『どん〳〵』燒の立會人とする。それて子供等は豫て墨を擂鉢に擂き、立會人なる聟を捉らへて、無理無體に顏へ墨を塗つて入聟の祝だと云つて居る。若し聟が其場へ來ることを拒めば、其家へ押掛け行きて引連れ來り、聟祝をするには油墨を塗り附けて困らす惡弊があつたが、今は學校などて嚴しく云ふのて少なくなつた。

上野岩野谷の鳥追

上州地方では、毎年正月十四日に道祖神燒と云ふを行ふが、中に

他の道祖神燒とは異なつて、碓氷郡岩野谷村字北野殿に奇習がある之を鳥追ひと云ふ。此の夜村内の若者小供等は群をなし多くの旗を立て、鐘太鼓を打敲き村内を練り歩き、各自口々に

『今夜ッ誰が鳥追ひだ、地頭殿の鳥追ひだ、頭切つて尻切つて佐渡が島へ流した、ホーホンヤ、ホーホンヤ。

と節面白く唄ひ、終には先に集め置きし御松などを燒くのである。

越後南魚沼地方の鳥追櫓

越後國南魚沼郡地方にては毎年陰暦十月十五日に『鳥追櫓』として去年より取除け置きたる山なす雪の上に、雪を以て高さ八九尺或は一丈餘りなる其高さに應じて末を廣く、雪にて櫓を築立て、これに登るべき段をも雪にて作り頂を平坦にし、松竹を立て七五三を張り内に居らるゝやうに蓆を敷き列べ、小供等は其中に集りて物を喰ひ

且つ鳥追唄を謠いつゝ遊び戯るゝのである。その唄に曰く、

『あの鳥や、何處から追つて來た、信濃の國から追つて來た、
柴を束べて追つて來た、芝の鳥も河邊の鳥も、立ちやがれほい〳〵。

『已等が裏の早苗田の鳥は、追つても〳〵すゞめすばとり（雀鳩）、立ちやがれほい〳〵。

この鳥追樽は村内に幾個となく作られ、各黨をなして遊ぶのであるが、暖國にては出來ぬ遊びである。

喰ふて寢て起て見たれば初日哉　也有
蓬萊に聞かばや伊勢の初だより　芭蕉
元日や神代のことも思はるゝ　守武
心から大きく見ゆる初日かな　一茶
日の春をさすがに鶴の歩み哉　其角
元朝や晴れて雀のものがたり　嵐雪
三椀の雜煮かゆるや長者振り　蕪村

節分

大和奈良の節分

厄拂ひの聲街頭に喧すしく、福は内鬼は外の聲は家々に立てられ、立つ春も明日よりぞと思へば、吹く風も早や暖き心地せらるる節分の夜は、一切の幸福を祈らむとて、奈良の人は春日神社に賽する者が多い。この夜は名にし負へる春日の燈籠、三千二百餘基に悉く點火する事とて、中々の壯觀である。石燈籠釣燈籠木影に閃めき、社前に搖らぐ、『火の中に人の押合ふ』と詠まれた通り、一の鳥居から彼方幾町の間は、火をもて埋めたやうである。

この夜賽する者は、飴と椿の造り花を買ふて歸る習ひて、うら若き乙女子の頭に白き羽をさせる者が往々ある。この羽子を人知れば

抜き取られれば、其女は縁附きが早いとて喜ぶとか云ふことである。

大阪の節分

大阪にては節分の夜は『お化』と稱し、市中の老婆は少女の姿となり少女は老婆の姿と化し、假令ば七十に近き老婆にして島田髷或は蝶々髷、十二三歳の小娘にして丸髷姿となり、衣服も大約之に準じ老若全く顚倒の粉粧にて、各所の神佛に參詣するのである。また花街にてはお化の風も素人と變り、藝妓の奥樣氣取り、娼妓の權妻風にて各所にあらはるゝもある。されどこのお化は過去十五六年以前までは殊に多くして、甚しきは男子の女裝をなし、女子の男裝となり、徘徊する者比々皆然らざるはなかつたが、近來風俗取締の嚴重なるがためにや、年々其數を減じたさうだ。

當日諸神社佛閣境内の露店商人の販賣する物品は、『鶴羽かひ』と

いふ鷺の毛にて作りし簪と、『引延し』と稱して一本の丙赤白二條に塗り分けたるをネジたる飴とて、この飴を食すれば命を引延し長壽を保つと云ふにあるのだ。

周防山口地方の節分

周防山口地方の節分の風習を記さんに、俗に此日は鬼が來ると言ひ傳へ、鬼除けのためとてだらと稱する茨ある木の幹を伐り、上部を割掛けとし香柴の葉を挿みたるを、表口裏口の兩側に立てゝ置き鬼の豆とて大豆に香柴少しばかりを混じ蒸りたるを一升桝に入れ、自家の神前に供へ置き、夕刻になれば小聲にて『福は内、〳〵』大音聲にて『鬼は外、〳〵』と喚びつゝ、家中隈なく撒き散らすのである。この香柴は鬼が嫌ふもの故用ふるのださうだ。こゝに可笑しきは『厄捨て』と稱し厄年に當れる人々、斯の蒸豆を我年の數だけ紙に捻り

銭一文を添へ、火吹竹の中に入れ四ッ辻に捨てることで、其際後方を見ては厄が落ちぬといふので、突然之を投げ捨て其方を見向きもせず、づん〳〵立歸るさまは何とも評の出來ぬ可笑しさである。

此日自家の神棚へは神酒を献じ鰯を供へ燈明を點じ、偏に福の神の宿らんことを祈るのである。また一家團欒し鯨の肉を下物として祝酒を酌むが、蓋し大なる年を取るの謂であらう。又奇麗な年を取らねばならぬといふ意より、男女となく老若となく齋戒沐浴し衣服を正し、夕刻より『年の夜參』として三々伍々手を携へて氏神に詣で、次に我志す神々に詣て、國家泰平家内安全五穀豊穣商賣繁昌を祈念するのである。

義之と磯士草書と假名で名を殘し
温公と勝家智慧で瓶を割り
芭蕉は飛び込み道風は飛び上り

七夕

駿河江尻の七夕祭

駿河國江尻町の七夕祭を記さんに、陰暦七月六日の前日より町内各戸にて、笹竹は申すに及ばず色紙短冊乃至は半切の類を準備し、翌朝七日は曉より田圃に出て、稲の葉芋の葉に宿れる露を清く洗へる硯にたゝへ、研りたる墨にて何れも七夕に關係ある、歌俳諧或は願事の數々を書き認めたるを、順序よく笹竹に結びつけ、中には雅致を競ふの餘り五色の紙を種々に工夫し、吹流しの如くになしたるもの其他思ひ〳〵の考を凝して、結びつけたるもありて準備の整ひたるを待ちて、各自屋前に建つるは毎年の例てある。この日は滿街錦繡を連ねたるが如き美觀にて、就中其盛況を占むるは市中の妓樓

で、遊女の如きは各自不相應の金員を醵して厭ふ色なく、笹竹の如きも通常より一層大なるを選み、充分の艶麗を主として居る。翌日に至れば各戸其笹竹を收め各町隨所に集め其祭を終るのである。

羽前鶴岡の七夕祭

羽前國鶴岡市中の七夕祭には、俗に『ねぶり流し』と稱へて、家毎に廣さ一坪余り高さ三四尺の棧敷やうの棚を設け、花筵を敷き籠を四方に垂れ家根を覆ひ、其内に机を置き花或は種々の果物を供へ釣籠を吊してある。この果物は瓜桃李枝豆等にて種々の花形を調理し、赤紫の汁に浸し辨當の小重箱へ入れて、近隣互に取りやりをするのである。この日は平素より一層丁寧に挨拶をなし、其出入送り迎へ等最も禮儀をつくし樂むのであるさうだ。近來はこの風習はだん〳〵頽れて來たとか。

節句

西丹波の菖蒲刀のお祝ひ

西丹波の山間の村落では、陰暦五月四日の晩に、各戸毎に菖蒲と伊吹とを三四本づゝ結むで屋根に上げ、菖蒲屋根と云ふのである。無論其偏僻な地でも男尊女卑は吾國一般であるが、其の晩に限つて女尊男卑とても云ふべきか、大に女が威張り散らす、で男は家に居るものはないくらゐで、青年及び少年は或一定の場所に寄り集まり思ひ〳〵に姿を化して、午後から刈り集めた菖蒲を一束とし中に小石や瓦の破片を入れ、竹刀の形に造る、これを菖蒲刀と云ふのであるが、其を各自に一振づゝ手に提げて、四方の別れ道や軒下に立ち婦女子の通るか戸外に出るのを待受て居るから、女も餘程の用事が

無ければ、決して戸外には出ないが、時とすると思はず便所に往き或は若き娘などが此辺に見つからぬやうに、家の裏や細道を通ることがある。それを見附るや否や、例の若者輩が飛び附く樣に、女を捕え、大聲で『お客さまだ〳〵』と他の者を呼集める。今や遲しと待受てる者共は直に馳せ集まり、何と云はうかゝんと云はうが、妻君であらうが娘であらうが、そんな事には一向關ひなしに、其女を道の中央まで引張り出し、各自菖蒲刀を振上げて婦人の臀を打ちながら、口々に節おもしろく『菖蒲刀のお祝ひ』と唄ひ出すので、其痛みと殘念さに堪きれぬ。『誰か助けてくれ』と聲を限りに助勢を求めても、誰一人之を助ける者はない。かくする中に其女の衣類を悉皆取りぬがせ赤裸にして、三四人で其家の戸口まで擔ぎ込み、それで最早用は無いのか、又元のやうに別れ〳〵になるが、其分捕品が四五人分出來ると一同を集めるのである。

衣類を取られた方では、酒肴及び幾何かの祝儀をして一封を添へて、御禮として衣類の取返しを請求に行くので、若者は直に禮物と引換に前に分捕した衣類を殘らず渡し。そして禮物の酒肴で、前後も忘るゝばかりに醉ふて、東明の頃夫れ〳〵別れて自分の家へ歸るのである。前の晩に裸にされた女も、格別恥にもならないのか、朝になれば平氣の平左で居る。

加賀鶴來の端午

加賀國石川郡鶴來町にては毎年舊五月端午の節句に、兒童は菖蒲を五寸ばかりに切り束ねて切藥の如くになし、中に短き杭三本を打込みて固め、之に紐をつけたるものを携へて路次に立ち『五月の節句を祝ひませう』と大呼しつゝ、路往く人の腰を一つづゝ打つ風がある。これは頗る痛いので外出の人の努めて之を避け、往來罕なる

裏路を廻り或は軒下に傍ひて、悄やかに走り過ぐる者が多い。又頭痛せぬ兒ひと云ふので男童は一本の菖蒲にて鉢巻をなし、女童は前髪に菖蒲と蓬とを挿し、又は菖蒲にて斧の形を製りて之を翳せるものもある、又當日菖蒲蓬熊笹を各一本づゝ束ねて、凡そ三尺を隔てて屋根縁の四隅に挾み、夜に入れば物負けせぬやうにとて同じくこの三品を一本づゝ、寢蒲團の下に置きて臥すのださうだ。

六日の朝になれば兒童等は、前日用ゐし菖蒲等一切の節物を携へて、町の西端を流るゝ手取川に至り『菖蒲川へ流れ、かみくるなぐ〳〵、ふとれ』と五回繰返して投ずるのである。かみくるなぐ〳〵ふとれとは、頭髪の長やかに肥らんことを祈るの意である。

讃岐琴平地方の馬節句

雛節句幟節句などは各地の古例として見るところであるが、讃岐

の琴平地方には馬の節句なるものがあつて、男子の出生せし家にては、其年陰暦七月二十七八日頃より八月一日即ち八朔まで、『初馬』とて米の粉を以て馬の形或は武者人形などを作り、馬の中にも草喰ひ馬、走り馬、荒馬などと種々に意匠を凝して作りたるを、段を設けて飾り立てるので中々見事である、そして其家では親族知己の人々を招き酒宴を催し、幼兒の健康を祝ふのが例である。

又同國高松市にてはこの日を『獅子駒節句』と稱して、獅子頭と駒とを團子にて作り、小松或は芝を生し山野を摸造し金屏風を立廻し、店先又は表庭に飾り諸人に見せるを例としてある、尤もこれも男子の産れし家のみに限るので、之を見物せんとて市中は中々の賑ひである。

盂蘭盆

京都六道の精靈迎ひ

京都松原通建仁寺町にある珍皇寺は、延暦遷都當時の火葬場たりしと、小野篁がこの境内の穴より、冥府へ往復した古跡であるとのことより有名で、篁が冥府へ往復した穴の迹とかいふ處には、丈六尺三寸の篁の木像を安置せる篁堂がある。こんな口牌よりしてか、都の男女は毎年七月九、十兩日（現今は陰暦八月）この珍皇寺に、盂蘭盆會の行なはゝ折、精靈迎へにとて往き、先づ境内にある迎鐘を撞き、いよ〳〵お出と云ふ時分に經木に戒名を書いてもらひ、本堂の前や地藏前にある水向棚で水向をなし、豫て買ひ置ける槇の葉を手向けて持ち歸り、一夜井戸へ逆釣にして置くと云ふ奇習がある

この槇の葉は、元は同寺の境内に巨大なる槇があつて、其枝を折て經木に手向たのであつたが、其が枯れてからは境内へ槇を賣る店が出來、其の店數も古來東西西側に十軒宛と極つて居る、本堂に近い程早く賣れる故、抽籤で其の順番を定め、賣盡せば次の番のものに其席を讓るので、中には追錢を拂つて早番を買ふものもある。

又斯る有難き寺に精靈を迎ふるためとて、昔の人は皆佛心で參つたのであるから、賽錢の如きも本堂の前に四斗樽を据へ、これに投せしむるに誰とて盜むものもなく、年中其儘に打捨置きて、出入の商人が入用丈其内より持歸つても、必ず返却して置いたものだが、漸次商人もずるくなり、また參詣人も少なくなつたので、現今では四斗樽に番人を附けるやうになり、又昔時は當日何程の賽錢があつたか、勘定はしなかつたが、此頃は勿々さうはゆかず、其日〳〵に計算して銀行へ預けるやうになつたとか。今の世の中では佛樣も油

斷せず御用心なさると見える。

下總布佐の新盆

下總國布佐町は利根川に沿ふての一宿で、昔は可成繁華な土地であつたが、何時の頃か洪水の爲め全町流されてからは、昔の面影はないさうだ、此の地方の于蘭盆會は一寸珍らしい。陰曆七月十五日の晩である、一家の内に死去た者があれば新盆といつて、其家の老若男女一同、それから親類縁者出入の者共が集つて、青竹を高く四角に組合せて、盆提灯だの盆燈籠を少くも二十、多きは百以上も結び附け、此に點火して町中押立て、女小供は賊着で、新盆への供物茄子胡瓜大豆唐蜀黍等の細かく刻んだのを箱に入れて、線香樒水を以て跡を跟いて歩む。この提灯は近所親類から新盆の家へ贈つて來る、數の多いのが外見で自分の家で買てまでも點る。夫から新墓の

前へいつて其提灯を建て、各自供物をして參詣をする。無論この夜は近傍の町村から見物に來るから、黒山のやうな見物人だ、參詣が濟むと此提灯を寺へ持歸り、悉皆外して彌次馬に與へるのが例である、然し若者は面白半分に建てゝある提灯を無理に倒す、すると我勝に集つて奪合ふから、滿足に提灯を取て歸る者はなく、大抵壞してしまふ、實に見事だが此際何時も負傷者が出來るので、警察署からは警戒の爲め巡査數名出張して居る、夫から各々家へ歸つて新盆の飾物のある前で、酒肴の御馳走が始まる、これも出來るだけ騒ぐ方が宜としてある。小供の新盆は少し違つて、鯛や玩弄物の畫いてある酸漿提灯を、長い薬竹へ附るだけの別だが、一層の美觀である。

尾張多加木地方の盂蘭盆會

尾張國丹羽郡多加木地方の盂蘭盆會を紹介せやうなれば、毎年陰

暦七月七日には。冥途から一年に一度の客の來るを迎ふる意で、先祖の墓へ花を手向け、或は香を焚き、瓜とか水瓜とか梨子とか云ふ時期の果物を供へる。十三日の夕刻になると、眞菰を苅り來りて菰を編み、其上に先祖代々の位牌を並べて、花を供へ燈明を上げて、軒の下には盥に水を汲で來客を待ち受くる、程經て家の主人は位牌の前に座し、眞に亡靈の客が來たかの如く時の挨拶やら、遠路の勞を犒ふやうに話しをする、後十五日の午後までは時々種々の御馳走を替へては供へ、十五日の夕方にはいよ〳〵珍客を送り出すので、是を送るには冥途への土産にとて團子を作り、生花や其外の供物と共に以前の菰に卷込み、其上に蠟燭や線香を焚いて、村の西凡そ二町程距りたる大江川に流すのである。

夫れでこの珍客の居る間即ち七日から十五日迄は、何處の家でも毎晩交代で通夜するのであるが、中には之の通夜を行はぬ家があるの家を起す爲めに、村の小供が大なる太皷を二つ鈎て、外に夫れ〳〵音のするものを持ち、其家の屋敷内に忍び行き、突然に太皷を打つやら外の鳴り物を鳴らすやら、散々に囃し立てるから、喧しさに堪え兼ね直に起き出で、御苦勞と挨拶すれば皆歸り行くが、若し起きなければ何時迄も行るのである。隨分野蠻な滑稽な擧動てはないか、中には隨分迷惑するものもあるので、或は之を叱り或は怒りて追ひ來り太皷を取上げたりする者なども有るさうだ。

駿河江尻の精靈流し

駿州江尻地方にては毎年舊暦七月十三日より十五日迄の精靈祭は何れも佛壇を淨め眞菰まゝ垣を始めとして、精靈棚をしつらへ、瓜茄子の牛馬など供へ物の品々に手を盡し、或は盆燒籠をかゝげ迎火を焚く等各地に行はるゝと異ならぬが、十六日の『精靈流し』はこ

の地方の特色であらう。當日は朝未明より老若男女濱邊に打集ひ、供物など眞菰に一と包にしたるを持ち來り、海中に投じ去るので中々の賑ひである。夜に入れば西邊なる巴川にて川施餓鬼を行ひ、信心深き者は赤紙の提灯を持ち來り、思ひ〳〵に放ち流すので、其川中に漂ふもの數限りなく燦爛として列星の如く、風のまに〳〵清水灘に流下する光景は、宛然東京隅田の流燈會を見るの感をなさしむるのである、されば當夜は靜岡を始め近鄉より見物に往く者がなかなか多い。

羽後横手の佛送り

羽後國平鹿郡横手町の「佛送り」と稱するは、毎年陰曆七月十六日の薄暮より蛇ヶ崎川岸にて行ふのである。この佛送りは精靈祭りの事で、何れの地でも七月十三日より精靈棚を設けて代々の靈魂を

祭り、僧を招きて棚經を行ふので、精靈棚は大抵佛壇を其儘用ゐ、眞菰を敷き菜食を供へ、精靈の乘り來り又乘去るが爲めにとて、瓜及茄子にて牛馬を作りて棚に置く。十三日には迎へ團子、十五日には送り團子を供へ、十六日には之を流すは一班と同じであるが、この横手町の佛送りは早朝より各町競ふて送り船を造り、船の上には青草の類にて屋形の形となし、正面に紙張りの墓を建て三界萬靈と大書し、前に各町の名を記せる札を立て、後方には音曲の囃しをつけ高張提灯數本を結び、大小の蠟燭五六百を並べ立て下は幕を引廻はしたものを、各町より一箇づゝ引き出すのである。送りの老若男女は股引袢天を纏ひ、高張或は騎馬提灯を持て船の周圍を警戒して居る、船は若者が之を擔ぎて蛇ヶ崎川岸に集り、こゝで式を行ふのである。

亥の日

阿波牟岐地方の「ゐのこ」祝ひ

月陰暦の十月に入れば、お正月の事始めと謂つて其の亥の日を祝ふ、所謂『ゐのこ祝ひ』の古習は、諸所に行はるゝが、阿波國海部郡牟岐村地方に行なはゝは、他て行ふものと異つて居る。亥の日は月の工合て二度ある年と、三度ある年とあるが、今假に三度あると すると、最初のを本と云ひ、中ののを中と稱し、後を末と斯う呼ぶのてある。そしてそれを祝ふには、各戸各其職業に隨つて本なり中なり末なりと擇むて祝ふ、例へば農夫は稻の根と穗を祝ふ心て、本と末を取る。商人は資本の意から中を、また漁夫は網の中、釣の先と云ふ意から、中と末といふやうに日取を極る。それて其都度供物

と祝食として、鮓や牡丹餅など各目〳〵好む所に依て拵へるが、小豆飯に大根膾と柚、てれは何處の家ても變りはない。

この夜子供や若者は各團をなして、各戸の門口に立つて、ゐのこ石と云ふ地盤固めの石のやうな、それに蛸の手然たる數條の繩を結び附てあるのを以て、ドシ〳〵地鳴がする程搗き固めながら、拍子を取つて唄を謠ひ、餅や牡丹餅などを貰つて歩くのだ。何の事はない乞食てある。所て其態度の順序は、最初の一團が或家の門に至ると、其中の一人が、『一つ祝ひまんでんしよ』と云ふ、蓋しゐのこを祝はふの義てある。すると内から『祝へ〳〵』の命が下ると始めるので、其謠に曰く、

『うれし目出度の若松さんへ……

一人が謠ふと他の大勢が之に和して、この文句を繰返して囃し立てる。

『枝も葉えて葉も茂る、

と、また他の連中が囃すらく、

『いよのーひゃうたんえ、は、えいと〳〵。

これを一曲となすので、尤も唄は千樣萬種、長いもの短かいもの種々あるが、お目出度いのと、笑はせるものとのみである。又節は一種獨得の面白味がある。

その始め『一つ祝ひまんでんしよ』と申入れた時に『祝へ〳〵』と來れはいゝが、家によると拒絶する事がある、すると仔細搏はず惡口が始まる、夫が若し平生から快よく思はれて居ない家などは、罵詈雜言殆ど停止すべくもあらずだ。何しろ少なくも五人、多きは三四十人も一團になつて居るのだから、何だつて堪つた理のものぢやない。夫て無邪氣にもまた可笑しいのは子供連で、惡洒落の人などは謠はして置きながら、態と其禮物を與らなかつたり、又は丸い

石や土製の餅を掴ませることがある。すると小供等は口惜さに、一同聲を揃へて、

『餅くれン家は、鬼生け、蛇生け、角の生た子產け。

と叫ぶので、呪咀も茲に至て無邪氣な、唯可笑しいと云ふの外はない。

目出度謠ひ納めると、輙ち例の餅と牡丹餅を恭しく朱塗黑塗の盆で以て捧げ出される、斯うなると妙なもので、如何に村一體の風習でも、元來物を貰ふのが目的でないから、流石に氣耻づかしく極りが惡く、連中は何れも逡巡みしながら、『おいお前行け』『いや貴樣出ろ』と、拒み合ふ。しかし貰はなかつたら反對に叱かられる例であるから、竟に仕樣ことなしに顏を隱くして、袖を出し『はい何卒こゝへ……』といふ鹽梅。これが村重代の風習なので、素封家の若旦那も乃至家柄の坊樣も、若いうちは大概少なくとも一度や二度は行

て見る、人も咎めず、我もさして恥しともせぬ。

備後三原の亥の子

備前國三原町にては、毎年舊曆十月初めの亥の日に『亥の子祭り』を執行する慣例がある、亥の子祭の前日から各町の小供等は、お迎ひとて早天より夫々一群を作り、太鼓を打敲くもあれば御幣を携るもありて、何れも口々に『亥ンの子や〳〵』と囃し立つゝ、最寄の田畑に至り其御幣を地上に振落して、其先の向へる方の地を掘り、土中より心に適へる石を拾ひ取りて、各町とも定めの家に神棚を設らへ置きて、この石を正面に据え、鏡餅饅頭果物抔何れも兩親より貰ひたる種々の物を、其前に供へて之を祭り、太鼓を敲き或は相撲など種々の遊戯をなし、又各町の有志は亥の子石とて、目方凡そ八九貫目位の圓き石へ、數多の環ある鐵輪を箝めたるものを藏めある

を以て、小兒等はこの石を持出して、鐵輪の環へ夫々麻繩を附け、周圍から其麻繩を執りて提げるやうにし、

『亥ンの子や、亥の子餅搗きやらぬか、搗きたらはあるが、ふんざがひかる、ひかつたら儘よ。

と唄ひつゝ町内を提げ廻り、尚軒別に亥の子祭の御燈明錢と稱へて賽錢を集め、澤山に出す家の門先にかは、口々に『この家繁昌せい〳〵』と祝ひつゝ、亥の子石にて地上を輕く突き、若し賽錢を出さざる家があれば『この家貧乏せい、〳〵』と叫びて、太く門先を突亂し行く。斯くして其夜は深更までも神棚のある家に群集して騷ぎ愈々當日となれば、未明より夫々集り來りて、前日の如く太鼓を打敲きつゝ騷ぎ立て、殊に夕景の頃よりは若者共も追々に加はり來りて、一層の賑ひを極むるのである。

筑後柳川地方の亥の子

延喜式の昔より陰暦十月亥の日は『亥の子』と稱へ餅を作ることは、今も諸國に行はるゝことであるが、筑後柳川地方に行はるゝは『亥の子』珍らしく感せらるゝ。この日點燈頃ともなれば殆ど家毎に或は店先き或は座敷都合によりてであらうが、何れも三寶の上に赤飯を堆かく盛りたる一丼桝を載せ、其隅には菊の花の匂ひこぼるゝばかりなるを挿し、別に羅蔔胡羅蔔の膾を添へ、柳の青枝にて一尺二寸と九寸との二種の箸を作り、さて用意よしと見る程に、早や近隣の若き客人の姿は見ゆるのである。五人六人戯れ狂ひながら節面白く『えいぎやう、ゑいさつ、なーわの、よーかの、よん』と踊り込む小童もあれば、二人三人手を引き合ふて、『おばはん、えいぎやうかかしてくだはれ』と優しく訪づるゝ小娘もある。家の人愛想よく

迎へ入れて居並ばせ、各自の手に柳の箸にて赤飯と膾とを取分くれば、其儘口に持ち行て食ふさまに誠に興がある。男の兒のうちに柳の青枝の大小嚴めしく横たへたるも可笑く、隣家の嬢樣が小さき手を重ねて差づかし氣に差出したる。向ひの坊樣が可愛き口に頬張りたる、何れも小兒だけにあどけない、終れば亥の子餅一つ二つの土産を持て立出で、一群は隣を襲ひ一群は向家に崩れ込むよと見れば又隣よりどや〳〵と亂れ入り來る新手もあつて、兒供の罪なき笑ひ聲は夜更くるまで絶ゆることはない。

> 困學紀聞に、戰國人民の氣象皆水に因るよし、管子を引ていへり。曰く水一則人心正、水濁則民心易、云々。淮南子にもこの既あり、人國記に引註すべし。
>
> (松屋筆記)

雜俗

大和奈良の山燒

奈良の春日山の北、手向山の南に一面に靑草生茂りて、恰も翠の毛氈を敷きたる如き山がある、俗に三笠山と云ふので、又若草の茂れるを以て若草山とも云ひ、其色に似たるにや鷲山とも云ふ。其景の美なことは人の知れるところである。

此山は毎年二月、日を期して火を放ち芝草を燒拂ふの定めである。當日は警官消防夫總出て非常を警め、相圖の太鼓と共に火を放てば炎々たる猛火山を包み、凄まじき勢にて燒進むので、忽ちにして一重目忽にして二重目、遂に三重目を燒き盡して終るのである。山燒の故事は何時の頃より始まつたか解らぬが、聞く所によれば往昔東

大寺と興福寺との間に、境界論の起つた時、或大寺の仲裁で何れの所有とも定めず、兩寺立會の上にて年々燒き拂ふ事にしたと云ふのである。

アイヌの熊祭り

『アイヌ』人は常に深山幽谷に熊の住むで居る穴を探して置く、其熊穴は彼等に取りては飲食物の涌き出づる倉庫も同樣で、これに依て自活の道を立て居るくらゐである。穴は大抵一家で三穴四穴多きは六七も保管して居る。内には熊の兒の幼稚なのもあり或は二歲くらゐなのもあるが、中で最も小く生れて漸く五六ヶ月も經ちし位の兒を捕り來り、婦は自分の乳で養養する。大凡そ二歲くらゐになれば其獰猛なる性質を現はすが、さうなると兎ても危險で人の手では養ふことは出來ないから、家の傍に丸太材を以て檻を作り之に入て

養ふ。檻の中で育てられた熊兒が三四歳か四五歳になると、最も猛惡なる性質を現はして、恰も蚊龍の風雲を望むといふ風で吠え猛つて居る。こんな風で到底長く養ふことが出來ないから其熊を屠るので其時の祭りが即ち『熊祭』である。然しながら其熊の兒は婦には大層馴れて居るから、何程狂ひ廻つて居るときでも婦に一度叱らるれば、犬が主人に叱られたときのやうに、耳を垂れ尾を下げ平身低頭する。夫れだけ熊兒は婦を畏れて居るが、又婦も其熊兒を自分の生兒のやうに愛して、決して殘酷な取扱ひはせぬ。それで熊の兒が既に屠らるゝ運命が頭上に降つて來た時は、其家の主人公は其部落は勿論他の部落にも通知して、客人を招待するのである。

熊を屠る式場とも云ふ處は、其家の北の方面に向つた場所に五六間程の柵を結び、其結び附られた木の高さは凡そ七八尺もあつて、其次は五六尺、其下は三四尺といふやうに階段をつけて作つてある

が、其一番高い木は奇麗に樹皮を剝き、之に御幣のやうに作つた物を最も高く、次に熊笹を花のやうに束ねた物を、下段には種々雜多の物を結びつけてある。左右には刀劍の類や鮭の干したもの、又其上には熊狐狸兎などの頭部の白骨を始め、其他種々の武器古器物、又は彼等の意匠を凝せし美術品飲食物などを供へてある。

やがて式場の準備が整へば、其主人公は勿論其一家族や招待された人々は、出來得る限り美服を着飾りて參列する。

其儀式に取かゝる前に招待された人々は、椀に濁酒を滿々と注いで、式場の下に屈んで口に呪文を唱へて、其濁酒を上下左右に再三再四はぢき出しては、立つたり屈んだりして殆ど一時間も祈禱して居るのだから、朝來明より取掛つて日沒後まで掛るのが通例である

やがて其祭りに立會つた人は皆祈禱が終ると、柵の右側に蓆を敷いて柵と直角に座る。又柵の左側に柵と一直線に直徑五六寸、長さ一

丈程の材木が二本置てあるが、これぞ彼の熊の兒に取りては斷頭臺である。

準備が終れば御本尊の熊を檻から引張出すので、これがなか〳〵の見物である。其高く作つてある檻の蓋には、五六寸もある板か或は角材を並列して、熊の兒が内から飛び出ることが出來ぬやうになつて居る。熊を檻から出す時は其家の主人公は、毛髮鬚髯を拂り沐浴して身體を淨め、頭や頸などに種々の玉を連ねし飾を掛け、身には陣羽織を着して充分に盛裝し、右の手には一條の繩を携へて檻の上に現はれ、天地の神祇に祈願をなしたる後、其繩を罠に作つて板の間から檻の内へ垂下げるが、熊はなか〳〵其罠にかゝらない。そこで婦の云ふことは聞くものだから、婦が罠に作つた繩を右から左へ、左から右へと捧十文字に掛ける。すると血氣の若者が五六人で檻の蓋を取除ける、熊は非常に凄い勢で一と飛びに跳出るが、間一

髮と云ふ隙もなく左右から強く繩を引くので、自由に動くことは出來ない、終に屠場まで無理に引き立てられる。屠場といふは其柵を結んだ所である。熊をこゝまで引き行くと、其時柵の一番近い所に座を構へた老人が、先づ一と箭弓に引違へて熊を射るのであるが、この箭は蓬と云ふ草の充分生長して全く木質に變化した、恰度竹のやうになつものを三尺ばかりに切つて其に羽根をつけ、矢先には柳を二寸ほどに切て之に墨で唐草のやうな模樣をつけてあるので、其矢は鋭利のものではないから、熊の身體には立たないで其儘地に落つる。若者等は繩を引きヤンヤと掛聲して、第二の老人の處へ曳て行くと、亦一と箭熊を射る、又連て行く又射ると云ふ有樣で、老人が十人居れば十度二十人居れば二十度、千偏一律同じやうなことをして、最終になれば盛に掛聲をなし何やら解らぬ唄を謠ひて、一と箭熊を射れば夫れで此儀式は終るのである。斯んなことをして居るう

ちは熊は殆んど死んだやうな有樣であるが、少し時間が經過すると忽ち元の猛惡なる熊に立返り、凄まじい聲を出して吠えるやら、其處邊りを搔きむしるやら死物狂ひになつて吠立てる。かくて熊の頸を柵の側に横へし二本の材木間に挾み、其上に上つて咽喉を壓して殺すのである。

二三時間前までは勇猛當るべからざる勢ひの熊も、今は黄泉に旅立つて、多くの人に垂涎されて居た金毛の皮は、そろ〳〵彼等の大切にして持て居る小刀で剝ぎ始められる。此時一列に並んで居た老人は一度に立上つて、前の柵に飾つてあつた弓の箭を天の一方北に向つて高く射放つのであるが、此時は口々に何か呪文を唱へては射る、矢の盡くると共に式は全く終り、酒宴に移るのである。

こんな工合で一軒の家の熊祭が終れば、又他の一軒が始めるので一部落に一年中に二三度もあれば手一ぱいださうだ。昔はまだ〳〵

難い儀式が澤山あつたさうだが、近來行はる『熊祭』は以上の如き順序である。

熊の兒が檻を引出され時、婦は多年我が生兒の如く養育した可愛のものゝ斷末魔であるから、聲を放つて泣叫ぶ、誘はれて兒供が泣出す、見て居た婦どもが貰ひ泣きをするので、なか〳〵の喧騒であるさうだ。

能登邑知遊廓の針歲暮

昨日の淵も今日は瀬となる飛鳥川、移り變るが習ひなる今の世に昔床しき『針歲暮』とて、其古事來歷は知らざれども茲に能登國羽咋郡邑知遊廓にて、古より行はれし習慣として可笑しきことをなし來つて居る。今其大概を記さんに、各靑樓にては前以て種々の準備を整へ置き、さて十二月八日の朝未明より、俗にお燒とて饅頭生菓

子餡餅の類を、誰彼の別なく配與するのであるが、中には誂製の向も多けれど、或向にては其樓の抱藝妓の手製の品もあるさうだ。斯くて各樓々にては馴染の客に對し、特別の待遇もて勿體らしく蒔繪の重箱にお燒を盛り、それに附文を添へて配れば、や之を受けし客は必ず過分の祝儀を取らすのである。又素見連などは此日廓内も溢るゝばかりに入込み、右のお燒を貪り、若し求めて與へざる藝妓があれば散々惡口を吐き、却々の賑ひを極むる。又粋士通客等は貰ひ集めしお燒を、殊更に人寄の場所に持ち行き、其多寡によりてデレ顔の廣狹を誇る習ひとて、中には態と饅頭屋より買て持ち行き、空威張りに威張散らす輩もあるさうだ。而して此のお燒の價を聞くに誂製向は一石二十圓位で、手製は小店にて石と纏めて製する必要なき樓にてするのである。この入費は悉皆藝妓の負擔に屬するものであるが。馴染客よりの祝儀を以て償ふことが出來るので、全盛の藝妓にありて却て小なからぬ所得があるさうだ。

長門下關地方の寒施行

長門の下關地方にては『寒施行』といつて、大寒になると最も寒き夜を選みて、赤豆飯と油揚或は乾鰯等を本物の狐に施行するので遊廓では戸々獨立で行るし、又中流以上でも獨立で行る家もあるが多くは懇意にする三四軒が共同して行ふのである。大抵は雪夜を主にして、五人十人と隊を組みて東の端から西の端まで、『寒施行、々々々』と大聲で叫びつゝ、山又山を辿つて稲荷の祠或は狐の居さう所には、どし〳〵撒き散すのである。撒き散すといつても杓子で撒くのではない、握つてある赤飯と油揚と乾鰯とを相當の量にして、多くは竹の皮に包むである、その包みを撒て與へるのである。何樣下關中の稲荷及び野狐に施すのだから、赤飯も少々では足りない、

まづ通常一隊が一斗ぐらゐな比例である、それを屈竟な男が擔いで行く。時とすれば其男が魅まれて、二日も三日も歸らないことがある、さうなると桝の底を叩て、戻せ歸せの滑稽を演ずることも往々ある。然し人命を害することは稀だとのことある。

日本奇風俗終

不許複製

明治四十一年六月八日印刷
明治四十一年六月十日發行
(日本奇風俗)
(正價金四拾錢)

編著者　大畑匡山
發行者　東京市京橋區新肴町十四番地　福田滋次郎
發行者　東京市日本橋區本銀町二丁目九番地　大塚周吉
印刷者　東京市神田區松下町十番地　横田五十吉
印刷所　東京市神田區松下町十番地　横田活版所
發兌元　東京市京橋區新肴町十四番地　晴光館

時光館好評書目

滑稽日本史	三十八錢 郵稅六錢	探檢小說 南洋王	三十五錢 郵稅六錢
古人の懺悔	四十五錢 郵稅六錢	探檢小說 空中軍艦	三十五錢 郵稅六錢
滑稽 德川明治史	三十八錢 郵稅六錢	探檢小說 地下戰爭	三十五錢 郵稅六錢
情の英雄史	三十五錢 郵稅六錢	探檢小說 大魔國	三十五錢 郵稅六錢
日本 歷史の裏面	三十五錢 郵稅六錢	寄宿舍日記	三十八錢 郵稅六錢
世界 歷史の裏面	三十五錢 郵稅六錢	旅衣	四十錢 郵稅六錢
新作落語	三十五錢 郵稅四錢	近刊 明治 歷史の裏面	未定
女醫者	三十錢 郵稅四錢	近刊 滑稽未來史	未定

31
T24

31
524

027379-000-6

31-524

日本奇風俗

大畑　匡山／編

M41
ADJ-0139